

剣技で桜が落とせたならば

阿部高知

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術師が剣を振るったりおき太と戯れたりヒヤツハーするお話。

目次

第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
69	59	49	38	25	13	1

第1話

二ヶ月前。

「ふむ……………これが令呪か。確かに合理的で画期的なシステムだが、如何せん無駄が多いな。四肢に浮き出て第三者からでも確認出来るようでは、切り落とされて無力化されるのが関の山だろう」

「しれつと恐ろしくなるような事を言わないでくれませんかねえ……………」

「しかし事実だ。もし魔術師同士の闘いになった時、私なら真っ先に令呪を狙う。令呪を使用されてサーヴァントを呼ばれては堪らないからな」

「はあ……………確かにそうだけどさあ」

伽藍洞に男の憂いが籠った声が染み渡った。反響した声が壁に消えていくようだ。

とある廃ビルを買い取り、仕事場として使っているフロアの一室。一組の男女が椅子を隣に並べて密着していた。お互いの距離は零、それこそ肌同士がぶつかり合うような距離だった。女の吐息が男の鼻を掠め、男の臭いが女の鼻に届く。まるで恋人同士のじゃれ合いのようで、見ている者が居るのなら思わず赤面せざるを得ない状況。しかし、当事者たちはその事で恥ずかしく感じるような感性を持ち合わせてはいなかった。

男からすれば彼女が人間ではない事を理解しているが故に興奮せず。

女からすれば肌が触れ合う以上の行為をしているが故にこの程度では恥ずかしくない。

廃れた関係だ——とは男の言葉だったか、女の言葉だったか。はたまた、この職場で働く冴えない青年の言葉だったかもしれない。既に十年以上の長い付き合いになるが、この関係性がこれ以上進展した事は一度も無い。あくまでビジネスパートナーである。

完全に私情と仕事を割り切っているからこそ、この二人の関係は成

り立っているのだ。肌を重ねる事自体もお互いが必要だと判断した結果に過ぎない。それが快楽を求める為や愛を育む為では無いのは、お互いの相互理解でもある。なんせ必要無いのだ。

快楽を得る事で強くなるのなら毎日のように行っただろう。しかし男はそうならない事を知っている。

愛を育む事で根源へ至れるのなら毎日のように行っただろう。しかし女はそうでは無い事を知っている。

かつて女の弟子が「師匠と彼は付き合っているんですか？」と質問した事がある。答えは二人揃って否だった。本心は兎に角、理性的であり利己的である彼らにはこのドライな関係が丁度良かったのだ。

「そもそも魔術師が戦う事になったら、直様サーヴァントを呼ぶんじゃないか？ 一応聖杯戦争に参加するマスター候補の資料は持っているけど……名前や経歴を見る限り、まともな魔術師は少ないぞ。俺然りバゼット然り」

「どれどれ……遠坂時臣ときおみの娘やアインツベルンのホムンクルス、それと中東からの魔術師はどうだ？」

「遠坂は判らないが、中東のヤツは結構魔術師らしいヤツだったな。でもアレは単純に技術不足、まともなのはアインツベルンくらいじゃないか？」

「ふむ、この面子なら確かに正々堂々と一騎打ちなどせず、サーヴァントを呼ぶかもな。しかし——バゼット女史やお前に限ってそれは無いだろう？」

「まあね。自分で言うのもアレだけど、下手なサーヴァントよりかは戦闘力があると自覚しているし」

二人の距離は肌が触れ合う程に近い。女が男の右腕を握りまじまじと観察し、男は女の質問に答えている。男の眉間に皺しわが寄っているのは、あまりにも女が無粋にペタペタと触ってくるからだろう。対して女の表情は無表情。それこそ実験を行う科学者のように、冷静に淡々と男の右腕を触診している。

男の右腕、手首から肘にかけての部分に令呪と呼ばれる刻印が刻まれている。赤で描かれた令呪の形は言い表すのなら三角形。人に

よつては別の形にも見えるような曖昧な形状。恐らく十人に聞けば全く違う回答が返つて来るであろう歪な形をしていた。事実、男はそれをピラミッドと例えたのに対して、女は三角フラスコと答えた。

思い浮かべる形状が違うのは当然——この令呪に形の意味など必要が無い。故に形状は曖昧で判りづらい。令呪に要るのは令呪の性能だけであり、何を象っているかななどどうでもいい事だった。令呪というシステムを発案した者が、魔術師という合理性だけを求める人間だったからこそその簡易さ。簡易であり、そして効力を英霊に絞る事に特化している御陰で莫大な効果を発揮するようにしている。

過去の英雄達を縛り付ける楔となるモノ——令呪。

それはとある闘いへの参加状であり、共に戦う仲間を律する絶対命令権でもある。これを支給された者は七人——彼らはマスターと呼ばれ、その闘いに参加する事になる。マスターは令呪という命令権を用いて過去の英雄^{サーヴァント}を召喚、殺し合いへ臨む訳だ。

令呪の画数は三つ、つまり強制的に従えさせる回数は三回。しかし実際、マスターが使える令呪の画数は二画までだ。

只でさえプライドの高い英霊を強制的に従えさせているのだ——もしも令呪が無くなり、自決させる事が出来なくなれば切り捨てられても可笑しくは無い。最も、まともな思考が出来る英霊なら^{魔力供給源}マスターを失う意味を判っているので裏切りにくいのだが。

この令呪を使って従えさせれるのは英霊、サーヴァントと呼ばれる守護者達。サーヴァントを使役する魔術師はマスター。過去の偉人を召喚するという奇跡を成し遂げ、ありとあらゆる願いを叶える事が出来る願望機は聖杯。それを巡って七人のマスターと七騎のサーヴァントが争う闘いを聖杯戦争と言う——男が知っているのはこの程度の情報と、聖杯に関する知識のみ。たったこれだけで死地へ赴こうというのだから、同じマスター達に馬鹿にされても文句は言えない。

だが男にとってはこの程度の知識で充分だった。どうせ自分に願いななど無い、あるのは強くなりたいという欲求のみ。まあ、同盟相手の為に知識は付けなければならぬのだが——。

「しかし——この聖杯戦争は考えれば考える程不明瞭な点が多い」

「そうか？ 単純に六人のマスターを斬ってサーヴァントをぶつ殺せばいいんじゃないか？」

「……………お前のような脳筋では判らないだろうがな、冷静になって一度考えてみる。」

まず第一に。何故サーヴァントなどと言う法外な存在を降臨させる必要がある？ 聞いた話によれば聖杯には根源へ至る事すら可能な魔力があると聞く。それならばわざわざサーヴァントに魔力を割かず、魔術師同士で殺し合いをさせればいい」

「確かに、冷静になってみれば不思議だな。リソースを余分に割く必要は無い……………まあ、有り余る程の魔力がある証拠なんだろうけどさ」

「次に。何故外部の魔術師を招き入れる必要がある？ 聖杯を作った御三家——遠坂、間桐、アインツベルンが争うのなら判る。だが、聖杯戦争では外部からも魔術師を呼んで開かれている。三人であれば手に入れられる可能性も上がるのに、わざわざ確率を下げる意図が判らない」

「聖杯は自身で担い手を選ぶって言うし、審査の為に数多くの魔術師を戦わせるんじゃないか」

「そして最後に——お前のような魔術の腕前は二流以下で戦闘だけに特化した男が、何故マスターに選ばれたのか」

「おい、押し倒すぞ」

思わずため息を吐いて項垂れる男と、うつすらと笑みを浮かべて男を眺める女。

隣室のコーヒーポットの稼動音だけが響く。数十秒後、甲高い音と共にコーヒーが沸いた事を伝える。億劫そうに席を立った女は隣室に消え、コーヒーが注がれたカップを二つ持ってきた。一つを男に差し出し、一つを自分の席の前に置いてポケットに手をつ突っ込んだ。取り出した物は煙草とライター。手馴れた手付きで煙草の先端に火を付け、物寂しく感じてきた口に啜えた。

俯いていた顔を上げ女の行動を見守る男。煙草の煙を味わいゆつくりと吐き出す姿はとても似合っていて、男性なら思わず憧れてしまふような格好良さがあつた。ハードボイルド——と言ふよりは大人の色気だろうか。見蕩れてしまふ魅力を醸し出していた。

コーヒーを啜りながらその姿を觀賞するのも楽しいが、今日此処に來たのはそれが目的では無い男は立ち上がった。それと同時に煙草を楽しんでいた女の視線が此方に向く。扉付近に置いていたキャリーケースを持ち上げ、女のデスクに傷が付かないよう慎重に置いた。

「それは？」

「依頼用の金だ。本当なら価値のあるアンティークにしようと思つたけど、黒桐君の給料が洒落にならないレベルでヤバいと聞いたので急遽現金にした」

「……………ハハハ。何を言うか、私はしっかりと黒桐に給料を払っているぞ？」

「何ヶ月前？」

「三ヶ月より先は憶えていない」

「あのなあ……………黒桐君が幾ら優しいからって、お金は必要だ。それに式ちゃんと結婚するんだから、財産が無いとか貧相過ぎるでしよ」

「……………別に両儀家の財産があれば事足りると思ふが」

「なあーにー？ 聞こえんなア？」

先程とは反対に、顔を逸らす女と問い詰める男。鼻先がくつつ付く程顔を寄せ、ジト目で女を睨みつける。

女——蒼崎橙子が経営する『伽藍の堂』は物作りの会社である。これと言つた経営方針は無く、社長である橙子が作りたいたモノを作るという適当ぶり。実際建築のデザインから展覧会の出品物、スピードカーのデザインなどなど。その仕事内容は多岐に渡る。

そんな会社には従業員が一人だけ居る。名を黒桐幹也こくとうみきやと言ひ、入籍を控えた幸せ者だ。何年も前から彼とその婚約者の關係を知つてい

る男からすれば今更な感じが否めないが、近頃になってようやく双方の両親から許可が出たらしい。子供まで作っておいて何言つてんだか——そう漏らしてしまった男を誰も責める事は出来ない。

結婚というものは金が必要。花嫁の実家が権力を持つ名家なので心配は要らないのだが、幹也にも男のプライドがあつたのだろう。結婚式の運営資金を全て自分が払うと発言したのだ。しかし幹也が勤める伽藍の堂は給料を払わないようなブラック企業、言つたのは良いがどうするか。そんな状態になって相談したが、この男であつた。

事情を聞いた男は直様金を用意、自身も用事依頼があつたので伽藍の堂へ赴いた——と言う訳だ。諸悪の根源とも言える橙子を睨む事数分、自分が劣勢になつたと判断したのか露骨に咳をして橙子が切り返す。

「所で、依頼の内容は？」

「コイツ——まあ良い。」

依頼は年季の入つた、魔術的価値すら持っている日本刀だ」

「年季の入つた——となると遺物か？」

「年代を重ねていれば誰が使つても構わないが、出来れば縁があれば助かる。狙つた英雄が召喚しやすくなるしな」

「……………聖杯戦争では西洋の英霊しか召喚されないという話だつた筈だが？」

「そう言うと思つて準備してある。これを見てくれ」

男がポケットから取り出して投げたのはリストだつた。それを受け止め、書かれてある文字列を追う橙子。忙しなく視線が動き、彼が渡した意図を暴いていく。

リストに書かれていたのは英霊の名前だつた。第二次聖杯戦争、第三次聖杯戦争、第四次聖杯戦争——聖杯戦争に召喚された英霊の名前が網羅されていたのだ。

「これがどうした」

「英雄の名前を見て気付く事は無いか？ 第四次聖杯戦争のサーヴァントをよく見てみる。或いは第三次のアインツベルンのサーヴァント」

「アーサー王、古代ウルクの王、ファイアナ騎士団の双槍使い、アレキサンドロス大王、湖の騎士、暗殺教団の長、聖処女に仕えた軍師、ゾロアスターの最悪神——どれも名を馳せる英雄だが………成程な」

「気付いたか」

「ああ——聖処女に仕えた軍師ジル・ド・レエやゾロアスターの最悪神アンリマユは既存の英雄とは一線を画している」

第三次聖杯戦争にてエキストラクラス復讐者^{アウエンジャー}で召喚されたアンリマユ。第四次聖杯戦争にて魔術師^{キャスター}のクラスで召喚されたジル・ド・レエは『反英雄』というべき悪霊だ。

今までの聖杯戦争で召喚されてきたサーヴァント達は、誰もが華々しい名誉や褒め称えられる栄光を持っている正英雄だった。だがそれも第三次聖杯戦争まで。

アンリマユは拜火教にてこの世のありとあらゆる悪を背負わされた神霊であり、ジル・ド・レエは百年戦争の戦歴ならまだしも、晩年は黒魔術に没頭し子供を凌辱したとされている。とてもじゃないが正英雄とは言えない経歴の持ち主なのだ。

それが正英雄ばかりが集う聖杯戦争に召喚された。それが指し示す意味は——

「——聖杯戦争は狂いつつある。原因は判らないが、少なくとも正常に起動していないのは確かだ」

「故に本来は召喚されない筈の東洋の英雄を呼び出す、と。もしも出ない場合は？」

「あくまで触媒として使うだけだから、失敗しても普通のサーヴァントが出てくるだけさ。日本刀も俺が使えばいいし」

「……………はあ。お前らしい無謀な案だな。」

——だが良い。仕事は仕事だ、しっかりと請け負うとしよう」
「ありがとう。特に指定は無いから、適当に選んでくれ。まともに使えるヤツをな」

「了解した」

話し合いが終わり、男は席を立った。橙子は止めるような事を言わ

ずただその姿を見守る。

下手をすればこれが最後の出会いだと言うのに——彼らの間に言葉は無かった。

「じゃあな。運が良ければまた逢おう」

「恐らく二ヶ月後には間に合う。素晴らしい品を用意しておくから、追加報酬は多めにな」

「馬鹿、そんなものあるか」
バタン、と。

音を立てて出て行く男を見守った橙子は溜め込んだ煙を吐き出す。色々な感情が混ざった煙は天井に溶けていった。



水を垂らしたような透き通る刀身、それから連想出来る斬れ味に思わず口元を歪める。

目の前に広げられている日本刀の名前は加州清光^{かしゅうきよみつ}。乞食清光とも言われる名刀だ。当時差別されていた人間が集う小屋にて作られた事から『乞食』と呼ばれる加州清光だが、性能は他の名刀と引けを取らない程良い。

観賞用に作られた美しい刀ではない故にシンプルで無骨だが、只々斬るという思いが籠った様には感嘆せざるを得ない。これを鍛冶した加州清光は刀を振るう者の心境が判っていたのだろう——刀身の長さから柄の重さ、ありとあらゆる面で斬る事に特化した刀だった。

実践用の刀だからと言って汚い訳でもない。透き通る刀身は鈍い鉄の光を宿していて、刃文の美しさは有名な刀鍛冶故に思わず見惚れる程。これを使って自分が相手を斬る——それを考えると、思わず身体が震えた。

鞘から抜刀している抜き身の加州清光を持ち上げ、試しに幾度か振

もしかしたら人生最後の戦場かも知れない——それならば、名刀を担いで死地に赴きたいと考えるのは仕方のない事だ。折角金を叩いて名刀を購入したのだから、触媒に使うだけでは勿体無い。せめて一人は斬らないと元が取れそうになかった。

「さて——そろそろ始めるか」

現在俺が居るのは拠点としている武家屋敷の地下。簡易的な魔術工房となっている此処は英霊召喚用に準備が進められていた。決して広くは無いスペースの中央には魔法陣が描かれ、手元には呼び水となる銀と鉄。召喚陣自体は大した規模のモノでは無く、非常に簡略なものだ。これも聖杯が勝手に召喚を行ってくれる御陰である。

サーヴァントなんて存在を召喚するのだから大掛かりな儀式になると思っていたのに、蓋を開ければ大した事の無い魔法陣を描くだけ。楽と言ったら楽だが、師匠から援助金を大儀式を名目にして筆記取る事が出来なかったのが悔やまれる。第四次聖杯戦争に参加していたマスターだからこそ、儀式の規模を知っていたのだろう。あの堅物が、ライネスに訴えてやろうか。

「——はあ、すう————はあ……………」

深呼吸を数回繰り返して息を整える。失敗は無いだろうが万が一も有り得る。己の血液で魔法陣を描いたので同調は充分だし、微弱ながら自身の魔力が籠った石も使う。成功率はかなり高いが————失敗に一パーセントも確率があるのなら、それは殺すべきだ。

心肺の鼓動を普段の状態まで低下。興奮している身体を沈静化。痺れ始めた四肢を回復。

——魔術回路、起動。

魔術回路への魔力補給開始。魔力の巡回と充填を確認。

令呪との同調開始、そして完了。魔法陣への同調開始————終了。

魔術回路の魔力循環を確認。魔術回路起動による拒絶反応を確認、沈静化。

全身への魔力循環完了。マナの吸収開始。

オールクリア
問題無し——。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

師匠から教えてもらった詠唱を刻む。言霊に乗せるは魔力と決意、全てを切り裂かんとする意思を聖杯へ伝える。聖杯が自分と相性の良いサーヴァントを呼び出すのなら、自分と同じ剣客を。その願望を伝える為に——意思を乗せて詠唱を続ける。

身体が熱い。人知を越えた存在である魔術は身体を蝕み、拒絶反応として痛みを発する。既に十年以上魔術を使役していると言うのに大魔術になると何時もこれだ。持っていていかれる魔力と比例する形で痛みが増しているのは気の所為だと思いたい。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。」

繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する」

召喚陣を通して聖杯からの魔力が吹き荒れる。召喚陣の中央に置かれた加州清光が震え、そして魔力を纏った。それはつまり——加州清光が聖遺物として、触媒として認められたという事だろう。

内心ガツポーズをしたくなるのを抑え、言霊を吐き続ける。ここまで来たのに台無しにする訳にはいかない。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

第五要素たるエーテルが室内を満たす。吹き荒れる魔力の嵐の中——目を見開いて、召喚陣を睨んだ。閃光など関係無い、召喚される戦友を見なくては安心出来ないからだ。第一、呼び出されて直ぐに見る光景が目を閉じた男など嫌すぎる。

「汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ——」

——ふと、唐突に。

目の前で吹きすさぶ奔流が、散りゆく桜吹雪に見えた。

「天秤の守り手よ——！」

一際巨大な魔力の奔流と同時——光が室内を包む。目を覆いたくなるような閃光に耐え、内部から発生している痛みに悶える。それらを全て無視して、召喚陣の中央に佇む影を見た。

それは桜だった。儂さすら感じさせる白い肌にそれを引き立たせる桜色の和服。梅紫色の袴には刀が差さっていて、一目でそれが加州清光だと分かった。白髪と見間違えう程の薄い桜色が彼女に恐ろしく似合っている。

嗚呼——なんて美しいのだろうか。俺は彼女に見蕩れていたのだ。

「新選組一番隊隊長。沖田総司、推参。あなたが私のマスターですか」

煙が晴れて声の主が姿を表す。凜々しくも優しい瞳に射抜かれた俺は、心なしか心臓が跳ね上がるのを感じながら応えた。

「ああ、俺がお前のマスターだ。これにて契約は成った——お前が俺に剣を預けるように、俺もお前に背中を預ける」

暗殺者のクラスとして召喚された沖田総司。

魔術はからつきしだが戦闘においてはサーヴァント並の戦闘力を誇る自分。

何ともまあ、ちぐはぐなコンビだこと。

「取り敢えず上に上がろう。そこでこれからの方針を話すとする」

「分かりました」

「……………言い忘れていた。

俺の名前は明日香鏡治^{あすかきょうじ}。呼び方は何でも構わない」

第2話

——最初、彼に抱いたのは根拠の無い親近感だった。

忌々しい宿敵と『座』にて戯れていたら、ビビツと頭に来るものが来た。それがマスターによる呼び出しとは私も彼女も思っておらず、召喚要請だと気付いた時は二人で仰天したものだ。

冬木の聖杯には日本——敷いては東洋の英霊が呼び出せる機能は無い。聖杯を作ったのが欧州の魔術師故致し方なのだが、その癖『座』にはしっかりと登録されているのだから困る。四度に渡る聖杯戦争で召喚されるかどうかで一喜一憂し、その度に裏切られてはノツブと共に泣くというのが恒例だったのだが………今回ばかりはそうではないらしい。ざまあノツブ。

沖田総司に与えられたクラスは剣士セイバーと暗殺者アサシン。新選組随一の腕前（途中で死んだヤツにそんな資格は無いのだが）という逸話からセイバーの適正を得て、池田屋事件を筆頭とする暗殺からアサシンの適正を持つている。宝具の多さで言えばセイバーが優秀だが、スキルを組み合わせるのならアサシンが向いている。

今回選ばれたクラスはアサシン。クラスの関係上『誠の旗』は使えないが、羽織があれば大丈夫だ。おまけに気配遮断もプラスされて更に隠密性に長けていると言えよう。マスターが宝具が一つ減った事を知れば損した気分になるかも知れないが、所詮は人斬りでしか無い私が、数々の逸話を誇る英霊が選ばれるセイバーのクラスに選定される事自体が可笑しい。私程度の英雄はアサシンで十二分だ。

『座』に記録として残っていた私に身体を与え剣を与え、現世へ呼び戻したマスター。本来なら呼び出される事の無い東洋の英霊である私沖田総司を呼び出す。その事実驚いて、そして嬉しかった。

生前果たせられなかった「最後まで戦い抜く」事。それを叶える機会を与えて下さったマスターには感謝してもしきれない。病弱と言う私の逸話はスキルとして残っているが、マスターから支給される魔力は十二分。『病弱』が悪いタイミングで発動しない限りは他のサーヴァント相手でも戦える。例え劣っていようと、呼び出された以上全

身全霊を掛けて戦いに臨む——それが流儀であり、望みを叶える事に繋がっているのだから。

「それじゃあ行つてきます。私の武勇伝を楽しみにしておいて下さいね！」

「うむ、精々初日で帰つて来るのが関の山だろうから、楽しみに待つておるぞ！」

「フアツキューノツブ」

「魔王の三段撃ちがそんなに見たいか？ ん？」

第六天魔王（幼女）に別れを告げて、私を呼ぶマスターからの呼び出しに応えた。

暗殺者^{アサシン}と言う器に入れられ、肉体が構築されていく。聖杯戦争に参加するのはこれが初めてだが、知識は聖杯から支給されていた。故に——自分が現世でどのような扱いを受けているかも知っている。

創作物として色々と改変されている新選組だが、その本質は人斬りだ。幕府を守る為とは言え、人を斬る事でしか解決が出来なかった。護るべき対象だった京都市民からも怯えられ、私に接してくれるのは近藤局長と土方さん、近所の子供達のみ。自分のマスターがどのような人物かまでは判らなかったが、どの道私^{人斬り}を知ってみれば怯えるのだろう——

——そんな諦めに近い感情はマスターを一目見ただけで崩れ去った。

群青色の着物と黒色の袴。ボサボサの頭は容姿に無頓着な証拠だが、不思議とだらしなく感じなかった。それはきつと、その頭が彼に似合っていたからだろう。或いはそのいい加減さが、かつての仲間たちを連想させたのかも知れない。

強い意思を感じさせるも虚ろな瞳、厳格そうに閉じられた口。しかし怖いとは思わない——雰囲気^{雰囲気}に優しさがにじみ出ている。聖杯からの知識で魔術師は非道だと聞いていたが、目の前の人物がそう

だとは思えなかった。発せられる空気は一般市民のそれなのに、彼の
本質は知識にある魔術師と大差無い。違うとすれば彼からは異常に
血の匂いがする事か。私とほぼ同世代なのに私と同様、もしくはそれ
以上の血腥さを感じた。

波乱万丈の幕末なら兎に角、今の世の中でこれ程まで血の匂いがす
るのは異常としか言い様が無い。人を斬れば捕まり、刀を持つ事すら
許されない。そんな現世でこの匂い————相当な異常者か達人に
違いあるまい。

それなのに空気は常人と変わりないのだから可笑しな話だ。言っ
てしまえば表と裏だろうか。表は人格者でも裏では殺人鬼……………
出来の悪い西洋の小説を読んでいる気分になる。

そんな経歴を持つているであろう彼に対し、私はどこか安堵感を抱
いていた。理由は判らない。それは恐らく親近感で、無意識的に彼と
自分が同じ人斬りであるのを感じていたのだろう。傷の舐め合い
しか出来ない自分に嫌気が差した。

「新選組一番隊長。沖田総司、推参。あなたが私のマスターですか」
目の前に佇む彼に口上を述べる。それは私が貴方のサーヴァント
であるという事の確認であり、お互いの契約の完了を急かすサインで
もある。

私の言葉を受けて彼はゆっくりと口を開けた。

「ああ、俺がお前のマスターだ。これにて契約は成った————お前
が俺に剣を預けるように、俺もお前に背中を預ける」

————表面には出さなかったが、内心この言葉には動揺してい
た。

マスターがサーヴァントに背中を預ける。それはつまり共に戦場
へ出撃するという意味だ。マスターはサーヴァントに比べれば弱い、
故に籠城するのが定番なのだが……………彼は自ら戦場に立つと言っ
た。自信の現れか慢心か。いつもの私ならそれを咎めていただろう
に————今回に限っては咎めるどころか嬉しく感じていたのだ。

かつて新選組の隊員と共に京都を駆けた事を思い出す。斬り合い
に於いて私情は挟まない事している私だが、それでも仲間に背中を

預け共に戦う事に喜びを見出したりはするのだ。共に戦い人を斬るであろう彼が自分を恐る筈も無い……………サーヴァントと言う存在になってまで言う事では無いが、人間誰しも忌避される事は嫌だ。

彼が言ったのは運命を共にすると言う事。つまり私と言う取るに足らないサーヴァントを信頼しているのだ——その事実には喜ばない筈が無い。

「取り敢えず上にならう。そこでこれからの方針を話すとする」
「判りました」

「……………言い忘れていた。」

俺の名前は明日香鏡治^{あすかきょうじ}。呼び方は何でも構わない」

付いてこい。目でそう告げた彼——マスターは階段を上り消えて行った。この場に残されたのは私と怪しげな魔術道具の数々。生前京都に住んでいたので陰陽道なら少し齧ったが、こういう西洋の類は見た事が無い。聖杯からの知識で何となくは判るものの、それもあくまで知識として。やはり直に知っていなければ。

周囲を見渡すと、壁に模造刀^{レプリカ}が飾られているのが見えた。あの憎きノツブが使ったとされる三大刀、圧切長谷部と宗三左文字と薬研藤四郎。近藤局長が愛した長曾禰虎徹、そして——私が生前使った菊一文字則宗など名刀の数々が抜き身の状態で飾られている。贋作と呼ぶべき模造刀だが、どう見ても刃は潰されていないよう……………。

「まあ、別に良いでしょう」

そう呟いて階段へ向かう。蠟燭で灯りを作っている所為か薄暗いが、この程度の明るさで池田屋を襲撃をした自分には問題無い。池田屋では薄暗い密室の中で数人の浪士を相手に戦ったのだった、暑い暑い真夏日だったのを憶えている——げ。

……………ああ、池田屋の二階で倒れたのを思い出してしまった……………。幸いにも敵が戦意消失していたから良かったものの、命を賭けた場で意識を失ってしまうとは……………なんと情けないのだろう。

「此方だ此方。……………って、何で落ち込んでいるんだ？」

「ううつ、何でもありません………。不甲斐なくて病弱な私が悪いんです」

「——？ まあ良い。さあ、入ってくれ」

階段の先は通路になっていた。先程までは無骨なコンクリート作りの密室に居たと言うのに、階段を上れば見えたのは木張りの床だった。どうやら武家屋敷の地下に拠点を築いているようだ———確か、魔術工房と言ったか。あまりにも作りが違うのは意図的なもので、恐らくは通常と異常を区別する為に分けているのだろう。

地下へと続く扉も前でブーツを脱ぎ、足袋で床を踏みしめる。鬱になりかけ落ち込んだ気分のまま、マスターの案内で居間に入った。畳が敷き詰められた居間は懐かしい和の香りがして落ち込んだ気分を癒してくれる。部屋の中央には机が置かれていて、向かい合うように設置されている座布団に座った。対面にはマスターが座り、温めていたヤカンで湯呑にお茶を注いでいる。

接客めいた態度と客人めいた自分。使い魔である自分も何か手伝った方が良いのだろうか………？

「ん、どうぞ。話し合いと言っても軽いモノだから、肩の力は抜いてくれ」

「ありがとうございます。その、何か手伝った方がよろしいでしょうか？」

「いや大丈夫。———おっと、お茶請けを持ってくるから待っていてくれ」

わざわざお茶請けなど出さなくても良いのに、マスターはもう一度立ち上がり台所の方へ消えていく。その影を目の端で追いながら、残された私は湯呑に映る顔を見下ろしていた。

桃色がかかった白髪にいつもと変わりない表情。本来は新選組員の証であるんだら模様の入った浅葱色の羽織を着けるのだが、今回は桃色の和服と梅紫色の袴を履いていた。決して羽織を失くした訳ではなく、『座』でノツブと協議した結果なのだ。

「だんだら模様の羽織は如何せん有名すぎる———それこそ、日本人ならば新選組に係るサーヴァントだと見抜かれる程度には。」

戦闘時に着けるのは止む無しだとしても、普段から着けてはまともにも活動が出来ない。故に普段着は袴にブーツで通している。……………結構似合っているので気に入っていたり。

台所からお盆に最中を乗せてマスターがやって来る。それぞれ二個ずつ目の前に置き、改めて対面した。

「さて——話し合いを始める前に、幾つか聞きたい事がある」
「はあ、何でしょうか」

「俺が質問するから、それに答えてくれ」

その真剣な表情に思わず此方も固くなる。理由は判らないが、どうやら相当重要な質問らしい……………!

目を一度閉じ——勢い良く見開いて、彼は言葉を発した。

「斬り合いにおいて」

「善悪なし」

「……………斬り合いとはそれ」

「斬るか斬られるか……………!」

「——つ、剣が折れたら」

「素手で殴れえ!!」

——ガシつと。気が付けばマスターと握手していた。

「いやあ、召喚した瞬間からどこか似ていると思っていたが——まさかここまでとは! こんなサーヴァントに逢えるなんて、俺は幸せ者だな!」

「ええ、ええ! 私も本質的に似ているのは判っていましたがこれ程とは! 理解のあるマスターに出会えて本当に良かった!!」

ああ、どうして新選組に彼が居なかつたのだろうか。もしも居れば唯一無二の親友になっていたかもしれないのに。

やはりマスターは自分と何ら変わらない人斬りだった。波長が合うのは判っていたが、まさか近藤局長や土方さんレベルとは。自分が褒められるような人種ではないのは判っているものの、それでも仲間が出来るのは嬉しいものだ。

握り締めたマスターの掌は男らしいゴツゴツとしていた。自分とはまた違う感触、体温に思わず心臓が高鳴る。それはマスターも同じ

ようで……………初対面だというのに照れているのが判る程、マスターの雰囲気は崩れていた。全く表情に出ていないのが腹立つが。

数秒間手を握って、力を緩めて解いていく。先程まであれだけ騒いでいたのが嘘のようで、嫌な沈黙が流れる。マスターがそんな空気を出す所為で……………その、此方も照れてしまう。新選組の家族とは違う男性の掌を触るのはこれが初めてだったりする——まるで生娘のような反応をしてしまうのは仕方のない事なのだ、うん。

「……………えー、あー、その。話し合いするか」

「……………そうですね。先程の事は水に流して、普通に話しましょう」
「気まずい空気が流れていく中、マスターの言葉に同意し強引に流れを戻す。」

「こほんと咳を一つ——マスターが淹れてくれたお茶を喉に通し、苦味が消えぬ内に最中を頬張る。和菓子は単品で食べても美味しいが、やはり一番合うのはお茶と一緒に食べる事だと私は思う。あの苦味と甘みが絶妙にお互いを引き立て合うのだ。」

「改めて自己紹介を。俺は明日香鏡治——日本出身で、令呪が出るまでは時計塔に所属していた。」

「使える魔術……………まあ、これ等しか使えないんだが『強化』と『結界』。後は『解析』ぐらいだな」

「何ともまあ、脳筋な魔術師ですね」

「それは言わないでくれ。まあ代わりに一つ一つの魔術の練度は高いし、本分は接近戦だからな——これからよろしく、沖田」

再びマスターが手を差し伸べる。先程のような偶然とは違い、親愛が籠った握手。

誠意に感謝し、此方も手を出して握手した。似ているとかそういうのを関係無しに、彼とは良い交友関係を作れそうだ。

「ならば此方も。新選組一番隊隊長、沖田総司です。アサシンとして現界しました」

「沖田はセイバークラスの適正もあるのか？」

「そうですねえ……………あるっちゃあるんですが、やはり神秘の薄い時代に産まれた所為か対魔力が低いです。それにアサシンの方が気

配遮断が使えますから、相性的には良いかと」

「成程な——了解。それで、宝具は？」

「私が持っている宝具は三つですが、その内一つはクラスの関係上使用が出来ません。まあ単純に言えば使い魔の大量召喚ですねー」

「まあ仕方ないか。他の宝具は？」

「一つは『誓いの羽織』。新選組員が着けていた、だんだら模様の羽織です。これを

着けるとステータスが上昇するのと同時、この乞食清光が菊一文字則宗に変化します。——菊一文字則宗で打てるようになるのが、最後の宝具『無明三段突き』です」

無明三段突き。

大層な名前だがその実態は全く同時に放たれる三度の刺突である。縮地という特殊な歩法を用いて急速に接近、一步目で音を超え二歩目で相手の視界から消え——三歩目に三段突きを放つ。原理として単純なモノだったりする。

………まあ、実際はそんな簡単なモノでは無いらしく。全く同時に刺突が存在する為、例え防御しても「壺の突きを防いだ箇所を式の突き、参の突きが貫いている」という矛盾が発生し、その箇所を崩壊させるとか。確か事象崩壊現象と言った筈だが——使っている本人がイマイチ判っていないのは、如何なるものか。

「把握した。——ああ、そうだ。俺たちには同盟相手がいる」

「同盟、ですか。別にそれ自体は構いませんが………信用に値する人物なのですか？」

仲間が居る事に越したことは無い。聖杯を手に入れる為に最後には戦わなくてはならないが、それまでの戦いは楽になる筈だ。二対一で戦闘を進める事が出来れば、かなり勝率は跳ね上がる。

しかし——背後から刺されるような事態が起これば意味が無い。私が心配なのはそれだけだ。

「信用、か。まあ大丈夫だと思う。五年間は背中を任せてきた戦友だからな」

「そうですね、なら安心しました」

信頼出来るのならそれで良い。後は友好関係を築けるかどうか——私、あまり話すのは得意じゃないんですよねー。

一息ついた所で再びお茶を啜る。重たい空気をお茶と一緒に流し込んだ。こういう仕事は土方さんが行っていたので、あまり慣れていない。所詮自分は斬る事しか脳のない人間なのだ。

「それじゃまあ………これからよろしく、沖田」

「ええ、よろしくお願いしますね——マスター」

私の使命はマスターを勝たせる事のみ。かつては京都を護る為、幕府を護る為に振るつた力を彼に見せよう。

それが出来ればきつと——最後まで戦う事が出来る筈だ。

◇ ◇ ◇

居間での話し合いが終わった私たちは、屋敷の隣にある道場へ足を運んでいた。

なんでもこの武家屋敷は冬木に滞在している魔術師から奪ったものらしく(実際こんな事をすれば土地セカンドオーナーの管理者からの制裁は免れないが、バレていないので問題ない)、冬木の土地柄故に武家屋敷なのだとか。私たちがアサシン陣営が陣を構えている深山町は日本風と西洋風の建物が入り乱れる特殊な町で、そこに住む魔術師の工房も和洋折衷——マスターは日本出身なので武家屋敷を強奪したらしい。本来は西洋のモノである魔術を日本式の建物で行うというのも、中々皮肉が効いている。

道場に来るといふ事は、刀を交えるといふ事。マスターと共に戦う以上お互いの実力は知っておくべきだ——という訳で仕合いをする事になったのだった。

「おおっ………！ 外から見ても大きいと思ってましたが、これ程とは」

「だろっ？ まあ、強奪した俺が言うべき事じゃないんだけどさ」

道場の中は新築同然の綺麗さを保っていた。

恐らく前任の魔術師は武芸に全く興味が無かったのだろう、使われた痕跡が全く無い。否、これが本来は正しいのだ。魔術師という生き物は魔術だけを極める為に生きている——私のマスターのように剣術をやっている方が可笑しい。魔術を使って戦闘をするのは兎に角、近接戦闘で斬り合うとか………おい、魔術しろよ。

ブーツを脱ぎ、素足になって板張りを踏む。神聖な道場は土足厳禁、それはマスターも理解しているので靴を脱いでいた。

壁にかけられていた竹刀を取って、道場の中央へ進む。通常の道場の二倍はあろう空間には無駄なモノが全く無い。竹刀と防具、それと清掃道具程度だ。鍛練場には不必要なモノを持ち込まないという精神には同意出来る。気を散らすような道具は要らない。

一通り道場を見渡して、背後に居るマスターに向き合った。

——そこに立っていたのは魔術師でも優しいマスターでも無い、一人の殺人者だった。

「よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします——一応言っておくが、手加減は要らない」

「無論です………では」

挨拶が終われば——待っているのは剣戟だ。

最初に動いたのはマスターだった。一応此方が先手を譲ったという形になるのだが………正直、侮っていたとしか言えない。この平和な時代に産まれた剣客は弱い——口では真剣と言ったが、心の何処かで慢心していたのだろう。

その速度は我々英雄と大差無かった。ダンと言う音の直後、私どころか床ごと断ち切ろうとして竹刀が振り下ろされる。愚直なまでの直進、そして単純な振り下ろし——しかし圧倒的な速度故に、回避困難な一撃まで高められている。

「——ッ」

「はッ」

油断しているとは言え腐っても英霊——左にステップを刻み、

鼻先を掠める竹刀を躲す。

マスターの攻撃はその一刀だけでは終わらない。回避されるのは重々承知、故に次の手段は用意されている。竹刀が床に付く寸前、腕力によって強引に竹刀の軌道を左に逸した。狙いは足元——まず駆動源を潰す魂胆らしい。

しかしそれは見えている。軽く飛び上がる事で足元を狙った竹刀を躲す。流石にこれを避けられるとは思っていなかったのか、マスターの動揺したような顔が見れた。確かにこれ程までに素早く、そして練度の高い連撃を回避出来る武人は中々居ないだろう——しかし私は新選組の一番隊隊長だ、舐めてもらっては困る。

動揺によって生まれた隙、それを見逃す程私は甘くない。落ちる勢いも乗せて竹刀を振り下ろした。

「せいっ！」

「——く」

完全に決まったと思ったのだが——マスターの実力は本物らしい。

足元を狙った払いの直後、回避されたと判断した瞬間に防御体制に入っていた。全力で竹刀を叩き付けたと思えば強引に方向転換し、直様刀身で受ける準備に入る……何と言う状況判断能力と直感だろうか。恐らくは魔術を使用しているのだろうが、それでも速すぎる。伊達に修羅場は潜っていないらしい。

身体が熱を持つ。例えば訓練だと判っていても——強敵と戦う時の高揚感は計り知れないものだ。

「中々やりますね……！……これなら安心して背中を預けられます」

「そりやどうも。沖田こそ、これ程までの技量がある、とはなア！」
竹刀と竹刀がぶつかり合い、鏢迫り合いになる。一度激しくぶつかった後、大きく後ろに後退した。

マスターも流石に追撃不可と判断したのか、追い打ちは掛けず竹刀を構え直す。しかし目で私の一挙一動を見逃さず追っている辺り、隙を見せた瞬間に切り込んでくるだろう。

「行きますよ」

「ああ、来い——！」

その構えは刺突、斎藤さんすら認めた突きの一撃。

一歩で五メートルもの合間を詰めて、マスターの眉間に向けて放つ。突きの名前は『壺の突き』——真つ直ぐに放つ故に速く鋭い刺突。下手な箇所にあたれば絶命しかねない一撃だが、寸止めすれば問題無し！

「はああ——ぐふう!?」

「獲った！」

「あいたつ！」

……………咳き込んでいる相手に全力で竹刀をぶつけるマスターは酷い人だ。

突きを放とうとした瞬間、胸元からこみ上げる衝動が全身を包んだ。まるで血を吐くような感覚——スキル『病弱』による弱体化。生前沖田総司の死因である結核を再現したスキルだが、これが中々曲者だったりする。

なんせ何時発動するか判らないスキルだ。戦闘中に不意に発動でもしたら目も当てられない。おまけにスキル故に治す事も不可能……………こればかりは天に命運を預けるしか無い。

「面倒なスキルだな、それ」

「ぐふっ」

「もしも反撃でもされたらひとたまりも無いぞ」

「がはっ」

「下手すれば宝具すら中止になるんじゃないか？」

「……………ちーん」

「やったぜ」

マスターは本当に酷い人だと思った。切に。

第3話

五年前。

英国イギリスの首都ロンドン郊外に存在する学園都市——そこは魔境だ。常識からかけ離れた知識と人間が数多く点在する、世界から隔離された魔界。大規模な施設と敷地を誇るその学園都市を、彼らは『時計塔』と呼んでいた。

認識障害と人避けが刻まれた結界を越えて、時計塔の敷地内へ入る。周囲を見渡せばぼつぼつと学生の姿が見える。学園都市なのだからそれは当然だが、やはり人影はとも少なかった。昼前でまだ授業を行っているとしても、些か少な過ぎる——否。此処ではこれが正常なのだ。彼らに友情を深めるような精神や信条は無い、あるのは自分を高めようという闘争心に似た欲求のみ。他人の研究の内容が全く判らない事すらざらにある世界で、昼食を共に食べる仲間が居る方が異常なのである。

街の中に存在する商業施設さえ、従業員の一人一人に魔術の効果が及んでいる。外界との接触を断ち、内部だけで経済を回すようにした結果がこの大規模洗脳である。生涯を全うするまで彼らはこの街の異常に気付かないのだ。それが哀れと言えば哀れだった。

表向きにはイギリスでも有名な学園都市、しかし裏では世間には公表出来ないような研究神を取り扱っている者共が集う巣窟なのだから、驚かざるを得ない。街全体を魔術の研究や保護の為に改造するのは良案だと思うが、規模が大きくなればなる程隠蔽は難しくなってくる。しかしそれでも西暦が始まってから今日まで、魔術という神秘が露見していないのは時計塔、敷いては魔術協会の影響力故だろう。

なんせ神秘の漏洩を防ぐためなら、街ごと痕跡を消しかねない集団だ。そんな組織と敵対したいとは思わない筈。抵抗出来るのは同規模の組織聖堂教会や権力自体が通用しない狂人ぐらいだろう。それ程までに時計塔の力は圧倒的なのである。まさか、ロンドン市民も切り裂き

ジャックよりも遥かに恐ろしい存在が間近に生活しているとは夢にも思えない。

学園都市を探索する事三十分。一際大きな建物が正面に広がっていた。空を仰ぐようにそれを見た後、迷う事なく一直線に目的の建物へ入る。

受付嬢魔術師の適当な挨拶を流して、上階へ続く階段を守っている警備員魔術師へパスポートを見せた。先代から引き継がれている、時計塔に所属している魔術師である事を証明するパスポートだ。書かれている学科は全体基礎科であり、結界と強化を修めている彼の家系に相応しい学科だった。

警備員はパスポートに貼られている写真を確認し、パスポートに魔術による工作がされていないか確認した後、受付嬢を手招きして一つの瓶を持ってこさせた。中身は翡翠色に光る怪しい液体。彼は何の躊躇も無く指を風の刃で斬り、滴り落ちる血液を瓶の液体へ落とした。

翡翠色に赤が混じった直後——液体の色が青色に変わる。それをしっかりと確認した警備員は固定電話で報告を入れて、階段を開けた。普段は日本に住んでいるが故に確認しなくてはならず面倒だが、それも致し方なし。母国で勉強する方が何倍も効率が良いのだから。

先程の液体は指定された血統を血液によって判別する魔術道具。登録されているものだったら青色に変わり、そうでない場合は橙色に変わる仕組みとなっている。

「ようこそ時計塔へ——お待ちしております、Mrアスカ」

「私のような若造にそんな大層な事を………それで、ロード・エルメロイ二世はいらっしゃいますか」

「勿論ですとも。さあ、此方へ」

アスカと呼ばれた男、明日香鏡治あすかきょうじは事務員に連れられとある個室を目指す。

二十を過ぎたばかりの若輩である鏡治が丁重に扱われるのは、ひとえに彼の父である五代目が優秀だったからである。時計塔を隠蔽す

る結界を任され、固有結界に至ったとも言われた逸材——それが五代目明日香だ。東洋の魔術師が重宝されるのは珍しい事であり、アオザキに匹敵する程の権力があつたとか。位階は典位フライドと高く、彼が生きていた頃には所詮基礎魔術でしかない筈の結界がブームになつたらしい。

時計塔は家柄を大事にする貴族が集まっている。故に典位の子息である鏡治への対応も丁寧なのだ……最も、田舎である東洋を嫌うロード達には嫌われているようで、この事務員がエルメロイ教室出身でなければ適当に扱われていた事だろう。

時計塔の構造は至って単純——アリの巣だ。倫敦の地下をどどん掘り進めて今の時計塔が形成されている。地下に行けば行く程狂気度が上がって行き、取り扱う神秘の濃さも増える。言わば漏洩しづらくしているのだ。

今回目指しているのは現代魔術科、別名「エルメロイ教室」だ。第四次聖杯戦争にて命を落としたケイネス・エルメロイ・アーチボルトの跡を継いだ、ロード・エルメロイ二世（本名をウェイバーと言つた）が開いている教室。何でも教え子の中には位階を持つている者が居るとか。あまり時計塔の事情に詳しくない自分でも、思わず驚いてしまった。

時計塔で位階を授かるのは相当な才能を持ったひと握りの魔術師のみ。そんな位階をまだ座学を修め切っていない教え子が授与される——ロードエルメロイ二世の才能は計り知れない。成程、道理で祭位フェスを与えられている訳だ。

「ロードは此処に居られますが……その、多忙故に手短にお願いします」

「判りました。案内お疲れ様です」

「ああ、それと一つ——何故か伝承保菌者ゴッズホルダーが随伴しておりますので、怒らせないように注意してください」

「伝承保菌者——？ まあ、判りました」

「適当な挨拶を済ませて——エルメロイと書かれている看板を掲げた扉を叩く。」

ノックをして数秒後、「入れ」と言う渋い声を確認してから室内へ入った。既に自分が来訪しているという情報は伝わっているだろうが、ノックするのは礼儀である。そこら辺は英国紳士なら厭しいだろう………まあ、ロンドンスターが英国紳士だとは思えないが。

部屋に入ってまず感じたのは煙草の香りだった。市販のモノとはまた違う、自作の品だからこそその独特の香り。喫煙者の知り合いが一人しか居ない鏡治にとっては煙草の違いは判らないが、臭いで品種が違う程度は判る。知り合いの喫煙者は希少価値の高い、職人手作りの品を吸っていたか——。

そう広くは無い部屋に、鏡治を含めて三人の人間が居る。一人は鏡治、一人は部屋の主であるロード・エルメロイ二世——そして、スーツで男装している長身の女性。何処か見覚えがあるような気がしたが、純日本人である彼にとって外国人の違いはイマイチ判らないので思考を放棄した。いずれは自己紹介がされるだろう………そんな思考停止にも近い考えに至った結果である。

「お初にお目にかかります。『典位』明日香鏡夜きょうやの息子、明日香鏡治です。よろしくお願い致します、ロード・エルメロイ」

「丁寧な挨拶ご苦労だが、ロード・エルメロイは止める。せめて二世を付けてくれ。只でさえロードの名は重圧だというのに、エルメロイまで付くと押しつぶされそうになる。それに——同世代から敬語を使われるのは虫唾が走って仕方がない」

「いや良かった良かった。俺も位階が上とは言え、同世代に尊敬語使うのは吐き気がするからさ」

「幾らなんでも瞬時に適応しすぎだろ………」

「私、鏡夜の息子ですから」

暫く睨み合って——不敵に笑い、お互いに握手を交わした。

ロード・エルメロイ二世は日本人嫌いだと聞いていたが、英語を話せる者は別らしい。或いは先程の会話が面白かったのか。特に無粋な対応をする事も無く、鏡治とエルメロイ二世は手を交わす。あまり強く力を込めておらず、只添えるだけのような握手。魔術師らしいと言えば魔術師らしい非力さだった。

——鏡治は知り得ぬ事だが、エルメロイ二世は明日香鏡夜に借りがある。

それはまだ彼がウエイバー・ベルベットと呼ばれていた頃。ケイネスが運営していたエルメロイ教室にて、ウエイバーはケイネスと敵対していた。最も敵対していると思っていたのはウエイバーだけであり、ケイネスからすれば意識すらしていなかった視線だろう。

三代目という歴史の薄いベルベット家出身のウエイバーは、血脈など関係無いという価値観を持っていた。しかし名門アーチボルト家出身のケイネスがそれを理解する筈も無く、ウエイバーの価値観を真っ向から否定。結果若かったウエイバーはケイネスを敵視するようになった訳だが——唯一その価値観を認めたのが、明日香鏡夜である。

東洋の田舎出身である鏡夜だからこそ、ウエイバーの思考は手に取るように判った。その思想に共感し共鳴した。彼自身はウエイバーよりも歴史の深い家出身だが、扱い自体はウエイバーとそう大差無い。味方は多いが敵も多い——明日香鏡夜はそんな人間だった。自分の思想を認めてくれる相手を見つけて、当然だがウエイバーは喜んだ。鏡夜は講師故に対話する時間は少なかったが、それでも青々しい会話には心躍ったものだ。

当時の経験を思い出して、思わずエルメロイ二世は苦笑する。今となっては苦々しい記憶だろうと——かなり有意義なものだった。故に。鏡治の願いを聞いたのも、その時の恩義があったからだろう。

「ロード・エルメロイ二世だ。あの忌々しい義妹が居ない今では本名を名乗りたいが、エルメロイを背負った以上此方で名乗らせてもらう」

「よろしく二世」

「よろしく——それで、此方が」

「バゼット・フラガ・マクレミッツです。一応貴方の先輩に当たるのでしょうか」

エルメロイ二世の手招きと共に、男装の麗人は自己紹介を始めた。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。フラガは確か神代から続く田舎の名門だったの記憶しているが、その末裔が時計塔に居るとは驚いた。フラガ家は時計塔の権力争いを避け神代の武器を守り続けている——そう鏡夜は言っていた。そんなフラガ家の令嬢が時計塔に通っているとは……………はつきり言うつもりだ。

宝具を護るのが使命である彼らが、外部に身内を出す理由が無いからだ。それはフラガ家の衰退を表している。時計塔に頼らなければならない程、フラガ家の血脈は薄くなっているらしい。

しかし神代から続く血脈は、薄くなろうと尋常ではない神秘が宿っている。魔術回路も段違い。ルーン魔術も堪能で、稀代の人形師以上の練度を誇るとか。一度手合わせを願いたいものである。

先程の挨拶で、彼女は自身の事を先輩と名乗った。つまり——

「——執行者への要望が、通ったのか」

「……………まあ、な。本来自分から望んで執行者になるような馬鹿者は百年に居るか否からしいが、見事に君はその百年に一度の人間に選ばれたらしい」

「私も最初は驚きましたが、ロードに許可が出たとは言え気安く話し掛ける辺りに納得しました」

執行者。簡単に言えば魔術協会が定めた封印指定を捕らえる役職だ。

封印指定の魔術師が神秘を漏らすような事態を起こした際、彼らは派遣され力づくで封印指定を捕らえる。聖堂教会からの代行者や妨害を退け、生きた状態で回収する——それを果たす為に必要とされるのは魔術師としての気質ではなく、戦闘力だ。

自身の鍛錬の為……………などと言う執行者に任命されたものが聞けば憤死しかねない理由で立候補した鏡治だが、どうやらエルメロイ二世の後押しや父の名声の御陰で無事に任命されたようだ。

……………まあ、彼がここまで簡単に選ばれたのには理由がある。執行者は体のいい便利屋と呼ばれる程度には過酷だ。研究に没頭した魔術師からすれば面倒以外の何物でもない。故に人気が無いのだが……………自分から志願するような馬鹿がいるのなら、利用しない手

はない。

そんな経緯があつて鏡治は選ばれた。無論本人の戦闘能力も高いのだけれど――。

「と言つてもあくまで候補だ。実際に出動した際の功績で、本当の執行者と認められるらしい」

「成程――了解した」

「丁度最近、封印指定が起こしたと思われる事件が南米の方で起こっています。恐らく近日中に出動することになるかと」

「それは良い。ならこれからよろしく、先輩？」

「……………普通にバゼットで良いです。貴方に敬語を使われると違和感がある」

「……………よろしくバゼット」

「ええ。よろしく願います、キョウジ」

苦笑を浮かべてバゼットの手を握る。その力強さはエルメロイ二世よりも遥かに高いものだった。



「はい、此方伽藍の堂です。本日は依頼等は受け付けておりませんので、また後日連絡をお願い致します」

「ん、ああ……………橙子か。口調が違い過ぎて別人かと思つた」

『見知らぬ番号だと思つたら鏡治きやうじだったか。それで何だ、依頼なら先程言つた通り受け付けていないぞ』

「俺だと判つたら人格替えるの辞めてくれませんかねえ」

『仕方ないだろう。お前と対話する時は常に眼鏡を外しているし、此方の方が蒼崎橙子に近いのだから』

「まあ俺も慣れている方が話しやすいけどさあ。つまり、俺に素を見せたいって事か？」

『……………まあ、そうなるな』

「キヤートウコちゃん可愛いー」

『切るぞ』

「待った。悪い、悪かったからそう拗ねるな——もっと好きになる」

『……………思ってもいない言葉がよくもまあスラスラと出てくるな』

「無駄に女性経験はあるからな」

『ふん、女の敵め』

「ある意味褒め言葉だよ」

『まあ良い……………それで、用件は何だ？ 只の世間話だったらさっさと切るぞ』

「いやな、遺物の件だ。加州清光を送ってくれてありがとう」

『そんな事か。お前が私に依頼し、私がその依頼に応えた。ただそれだけの事だろうに』

「俺も普段なら連絡しないんだが——もしかしたら、今回が最後かもしれないと思ってな。感謝の意ぐらいは伝えてから死のうかと」
『縁起でも無い事を言うな。お前にはこれからも伽藍の堂を支えてもらわねばならん』

「……………完全に金を雀る気満々だよな？ ええ？ 毎回大金を落とす俺から雀る気だろお前」

『ハハハ、馬鹿な事を——心配しているのは本当だ。まあ最も、お前が死ぬかと言われれば応とは言えんがな』

「別に不死身って訳じゃないんだがな——単純に生存能力が高いだけだ」

『それが戦士に必要な最優先事項だろう？ 高い戦闘力でもなく、優れた技術でもない。真の戦士に必要なモノは戦場で生き残れる能力だ。例え一度は敗退しようと、次に勝てば良い。何処かの軍人も言っていたな——帰ろう、帰ればまた来れるから、と』

「まあ執行者なんてやっていけば嫌でも生存能力は上がるよ。死人を傀儡に変える魔術師と戦った時なんて、四方八方敵だらけ。その中で封印指定を生きて捕らえなければならぬ。おまけに敵対勢力も居聖堂教会

た……………聖堂教会の神父の力を借りてようやく打破したぐらいだからな」

『神父が協力したのは興味深いが、やはり執行者は人外ばかりだな。まともに私が相手しても敗北するだろう』

「稀代の人形師が何を言っているのやら……………それに、お前が死んでも第二第三の蒼崎橙子が現れるんだから問題無いだろう？」

『それもそうだが』

「それでまあ、話を戻すけど——加州清光が思った以上に素晴らしくてな、五百万程度じゃ報酬不足だろうから、追加で送る事にした。何かリクエストとかある？」

『そうだな……………ならば令呪を一画貰おうか』

「切るぞ」

『冗談だ。いいか、切るなよ？ 絶対に切るなよ……………ふう。わざわざ送らなくてもよいのだがな……………まあ好意はありがたく受け取っておくでしょう。強いて言うなら——』

——お前が無事に帰って来るのが、追加報酬だ』

「……………橙子も、結構クル台詞を吐くよな。目の前に居たのなら抱きしめたいぞ」

『仕返した。……………全く、言った此方が恥ずかしいぞ……………』

「……………』

「お互い痛み分けて事で、そろそろ切るか。電話受信されている可能性もあるしな」

『了解した。それでは——またな』

「……………ああ、また」

「はあ——生き残る理由が増えてしまった」

受話器を置いてそう呟く。頭を掻き毟りたくなった。

聖杯戦争は殺し合いだ。名目上は魔術師らしく魔術戦となっていくが、聖杯を手に入れる為ならば手段すら問わない外道すら出てくる。恐らく正面からの魔術戦など起こる方が珍しいに違いあるまい。

殆どの死合が闇討ちや不意打ち、罨を張った状態での一方的な戦闘になる。自分を除く全員が手加減無し^の戦闘を仕掛けてくる状態——弱気な発言をすると、自分が生き残れるか判らなかつた。

戦闘経験は執行者時代に嫌という程積み、魔導経験も生きた瞬間から重ね続けている。自信と実力は備わっているつもりだが……それを覆す事の出来る存在を知っている。英^{サーヴァント}霊共からすれば神秘の薄いこの時代に産まれた自分なんて、そこらの雑兵よりも弱いのだろう。

まあ、勝てるかどうか判らないのはサーヴァントと敵対した場合だ。マスター戦なら確実に勝てる自信がある。音を立てずに相手へ近づく歩法「絶歩」からの一撃——この流れなら現状判明している敵対マスターの殆どを葬る事が出来る筈だ。アインツベルンとバゼットには通用するか怪しい(特にバゼットには手の内がバレている。此方も同じだが、バゼットの宝具は初見だろうと既知だろうと関係ない)が、沖田と共に仕掛ければ問題あるまい。

「おーい、おきたー。団子でもつまんでいかないかー？」
「あ、はい。すぐ行きます」

縁側まで移動してから、屋上で霊体化しつつ監視を続ける沖田へ声を掛けた。

音も無く傍に現れ、お盆からみたらし団子を一個取り頬張る姿は可憐そのもの。年相応の可愛らしさでも言おうか、思わず愛でたくなる。桜を連想させる彼女がみたらし団子を食べる姿は、正しく大和撫子。気品さと優雅さに溢れていた。

これが俺の召喚したサーヴァント、アサシンのクラスにて現界した剣士——沖田総司。史実では新選組一番隊隊長であり、男性と言われていた筈だが……どう事実が曲解したのか、召喚された沖田は女性だった。大方沖田総司のイメージの一つである「美形で色白な好青年」は女性の顔付きや白い肌から来ているのだろう。

召喚した当初は女性である事に驚いたが、所詮はそれだけ。実際に刀を交わせば性別を超えた実力がしつかりと見れた。スキルも宝具も申し分無い、自分に相応しいサーヴァントだ……まあ、彼方が

満足しているかは判らないけれど。

縁側に腰を下ろし、もきゅもきゅと団子を頬張る沖田をなぞって三色団子を食べる。もちもちとした食感や喉触りが素晴らしい。それと共に飲む抹茶こそ至高の一品——単純故に究極の組み合わせだった。

「やっぱり甘味は素晴らしいものです。京に居た頃も仕事の合間によく甘味処で食べていました」

「へえ、ここ数日ずっと見回り見回りばかり言っていたから一日中仕事するような真面目だと思っていたけど………案外、その辺りは普通だな」

「うぐつ………。まあ、京都も一日中物騒という訳では無かったの。昼間の内はあくまで偵察や諜報、夜間に襲撃が基本でしたからね。昼間にするのは見回りぐらいでして、それも時間交代だったの。その隙に甘味を頂いていた——という訳です」

「何と言うか、女子らしい」

「そうですね？ イマイチ女性らしさというモノは判りません」

団子で頬を膨らませる姿は可愛らしいというのに………本人にその自覚が無いのだから残念だ。

茶を啜りながら思う——まともに聖杯戦争をしていないなあ、と。一応沖田を召喚してから数日の間に新都や深山町へ使い魔は放っており、設置物に偽造された感知型のマジックアイテムも張り巡らした。サーヴァントのような高貴な霊格を感知すれば魔力を飛ばし、受信元である俺に来るようになっていくが、少なくとも設置してから一度も魔力が飛んできた事は無い。

破壊されていないのは明朝直に確認している。つまり現在サーヴァントを召喚しているマスターは少ないのだ。只穴熊を決め込んでいるだけかもしれないが、それはそれで都合が良い。此方にも準備期間はある方が、おまけに長い方が良い。

姉妹館の掃除とか、男に任せる仕事じゃないでしょ。断らない俺も俺だけだ。

「おや？ 何見ているんですか、マスター」

「ああコレ————聖杯戦争に参加するであろうマスターを纏めた表」

「ちよつと見せてくださいよ。どれどれ………ほう」

団子も食べ終わり茶も飲み干した。一息吐いた所で改めて対策を練ろうとした所で、沖田が顔をずいと寄せて来る。くせつ毛が鼻に当たり何とも言えない芳香が覆う。それは決して不快ではなく、寧ろ女性らしさを感じさせる甘美なものだった。

手元にあるリストには、時計塔の知人やエルメロイ二世に調べてもらった成果が綴られていた。自分を除くと五人のマスターの情報が書き綴られている。五人の内の一人は見知った人物なので除外しても、既に四人の情報を得ているのは相当なアドバンテージになる。

三人は聖杯戦争の基盤となった御三家————アインツベルンのホムンクルス（名称不明。情報が少な過ぎる）、時計塔でも有名だった遠坂時臣の娘遠坂凛、他の二家に比べれば影の薄い間桐臓硯だ。

アインツベルンは只でさえ引き籠っている上に、まともに情報が無い。どうやらよつぽどの秘密兵器を投入してくるらしい。遠坂凛は何度か時計塔を訪れているので情報が多く、何よりエルメロイ二世と関わりがある故に魔術属性までもが漏れている。最も、二世も自身の生徒の情報は容易く教えてくれなかったが。間桐臓硯も情報は少なく、第三次聖杯戦争に参加した際は蟲を使用したらしい。数での暴力が懸念される。

後一人は中東の石油王の息子、アトラム・ガリアスタ。練度自体は若い遠坂凛と同等だが、財力に物を言わせて超特大級のサーヴァントを召喚してくる可能性がある。時計塔の知人が察知した情報では竜殺しの英雄の聖遺物を捜していたらしいが断念。同じく竜関連の聖遺物を捜索しているらしい。竜————と言えば幻想種の最上級。それに関連するサーヴァントなのだから、手綱を握るのは大変だろうが強力な力を有するに違いあるまい。

そして五人目がバゼット・フラガ・マクレミッツ。背中を預けた戦友にして今回の同盟相手だ。戦闘能力は心配していないが、召喚するサーヴァントが気になる。契約でサーヴァントの真名については尋

ねない事になっているが、いずれ戦わねばならぬのだから調査はする。何でもケルト神話に関連する聖遺物を準備した、との事だが………ケルト神話を始め、神話を基準とした英雄は多すぎるから困る。有名なのはクー・フリーンやフィン・マツクールだが、別の英霊の可能性だつて否めない。

「まあ別にどうでもいいんだけど。斬って殺せば良いだけだし」

「何を考えていたかは判りませんが、その考えには同意します。サーヴァントとて生者——斬って命を断てば死ぬ」

「やべえ、気持ちが悪ってきた。ちよつと打ち合わないか？」

「良いですね、私も食後の運動と洒落込みたい所でした」

「そうなれば刀を交わすでしょう。サーヴァントとの交流の為に、実力の把握の為に——自身の研鑽の為に。」

「いずれにせよ時間はある。その間に色々と準備を進めるとしよう。」

第4話

——正直な所。バゼット・フラガ・マクレミッツは、明日香鏡治あすかきょうじが好きではなかった。

時計塔のロード・エルメロイ二世の私室にて彼と対面した時、鏡治から感じたのは軽薄さである。

鏡治と同世代であるエルメロイ二世が許可したとは言え、位階が上の相手に対し敬語を使わない。一応は先輩である自分に逢うというのに（実際は彼は知らなかったが）、私服である自分に逢うというして女性らしくないと抜かすなど………：武士と侍の国出身とは思えない立ち振る舞いをする彼に、バゼット・フラガ・マクレミッツは見当違いな怒りを憶えた。

武士と侍は死んだ。血脈は続いていようと、戦場で発揮されていた魂は朽ち果てたのだ——彼が言った通り、今の日本人にそんな謙虚さは存在しない。彼以外の日本人と会話しても、あくまで社交的な態度と会話ばかりで描いていた武士像とは全く違うものだった。

簡単に言えば、バゼットは夢を潰されたのだ。貴族達の排他的な空気に嫌気が差し、極東から来た新風に期待していたというのに。実際にやって来たのは現代に染まりきった魔術師だった。それが当然だと言うのに、心が少女と殆ど大差ないバゼットは夢を見てしまう。だから見当違いなのだ。

それ以来、同じ仕事執行者の仲間として様々な場所や時間を共にしたが、彼の軽薄さ——否、飄々とした雰囲気は変わらなかった。命を賭けた死地であろうと笑い、極悪な魔術師を相手にしても怯えない。己の命を軽く見ている、その癖自分以外の人間は護ろうとする。バゼットが真剣に出撃している傍ら、一人で煙草を味わっていたのは記憶に新しい（当然後でお仕置きしたが）。

彼を見ていると、何事にも真剣に取り組んでいる自分が馬鹿らしくなってくる。気張って生きているのは息苦しく、時計塔の社会で暮らすのはしんどい。彼はそれと全く無縁であり、父親の権力を振るう事は少ない。執行者に任命されたのは立候補したのが大きく、父親明日

香鏡夜の位階はあまり影響が無かったのだ。

……結局。バゼットが彼を嫌うのは、彼を見ていると自分が馬鹿らしくなるからだろう。悠々と生きている彼が羨ましいのかもしれない。

今まで周囲を見て育ってきたバゼット。彼のように我が儘ままに生きれば、どれだけ楽になるのだろうか——。そんな事を考えてしまふ自分が嫌で、八つ当たりで彼に当たってしまう。しかしそれをバゼット本人が気付くのは、数年後の事である。

トラックの荷台が一際大きく揺れて、その振動で目が覚めた。

微睡まじろんでいた意識は一転し、動いた頭が荷台の壁に直撃する。幾ら屈強だろうと彼女——バゼット・フラガ・マクレミッツは女性だ。近くで警戒を続ける彼に比べればか弱い自信がある。鈍痛が直接脳に響き、彷徨さまよっていた意識を覚醒へと導いた。

思わず跳ね起き周囲を見渡す。トラックの荷台の上、ダミーとして置かれている段ボールと相方が居た。ドタバタとしている筈なのに視線を向けず、何処か遠い目で空を仰いでいる。その姿勢がまるで自分に興味を抱いていないように感じて、何故だか腹が立った。だからと言って此方を見ていれば痴態を見た、と言って騒ぐというのに。

空を見上げる彼がバゼットに気付いた素振りには無い。意識を向ける事無く、只々悠然と構える姿は彼らしい。その姿に呆気を取られて、大人しく腰を下ろした。

交代しながら睡眠を取る事三時間。次は彼が眠る時間帯だが、既に魔術師が居るとされる地域に入っている。言わば敵地だ——。そこで眠る程、バゼットも彼も腑抜けていない。

昨夜は一睡もせずに出撃の準備をしていたが、一週間程度なら不眠不休で生活出来る体力はあるつもりだ。それなのに睡眠に身を委ねてしまったのは精神の安定と——。ひとえに彼を信頼しているからだろう。

「……………おっ、ようやく起きたか。そろそろ潜伏先に着くぞ」

「——判りました。それで、その……………私の寝顔、見ました?」
「それは勿論、がつつりと。普段は凜々しい癖に無防備になると可愛らしくなっちゃって。愛らしくて仕方がない」

「なっ……………! 何を言っているのですか、貴方は!? そ、そのような事を言つて私をたぶらかして……………ッ!」

「バゼットは敏感だからなあ」

「その言い方では私が淫乱みたいじゃないですか」

「え、違うの?」

「違います!」

トラックの運転手が人間ではなく人形で良かった、とバゼットは心の底から安堵した。他人だろうとこんな痴話喧嘩とも取れるような言い争いは見せたくない。特に自分が翻弄されている姿など、当事者である彼を除けば誰にも見せたくないかった。

まあ人形を通じて時計塔に音声は伝わっているのだが、人形に詳しくないバゼットが気付く筈が無い。盗聴されていた事実をバゼットが知るのは、任務を終え時計塔に帰還した時である。

無防備な寝顔を見られた事や可愛いと言われた事で、思わず赤面してしまう。時折……………否、毎日のように彼はこうしてバゼットをからかって、いやらしく笑うのだ。

バゼットがあまり異性への耐性が無いと判明してから半年間、彼は戯言で彼女の心を弄んでいた。思ってもいないような言葉を綴り、思わせ振りの態度で煽る。時々見せる淫靡な表情と心臓を握る魔性の言葉は淫魔のそれ。魅了チャームでも使っているのだろう、彼の言葉はバゼット女性を大いに疼かせた。仕事柄肉体の経験はあるものの、心の経験は皆無と言つていいバゼットにとって——彼の言葉はまるで蜘蛛の巣のように、自身の心を絡めていく。

幸いなのは、今の所肉体関係が無い事か。只でさえ精神を墮とされかけているというのに、肉体まで彼色に染め上げられたら……………それこそ抜け出せなくなってしまう。

彼の容姿は優れている。飄々としているが瞳の奥にはれつきとした覚悟と決意があり、刀を構えれば一級の戦士と化す。普段の軽薄な

イメージが何処か親しい印象を抱かせている。しかし———実際
の所、彼の在り方は不安定だ。

戦場にて生きる戦鬼。斬り合いで自身を昂める狂人。命を賭けた
刹那にしか価値を求められない哀れな男。これ等全て、彼を形容する
言葉である。命を天秤に賭ける事でしか意味を求められない彼は、女
性が抱く母性本能を酷く攪るくすくのだ。不安定な貴方を支えてあげたい
———そんな欲求を、少なからずバゼットは抱いていた。

「……………おほん。では突入前に、作戦の確認をしましょう」
「目標は封印指定。相手は植物と意思疎通を可能にする魔術師故、潜
んでいると考えられる森林全域が敵だと想定される。……………
偽神の書とは違い、一方的な意思疎通では無くお互いが会話出来るの
が厄介だな。植物が感知した情報を魔術師に送られるとなると、それ
こそ全てを把握されているに等しい」

「それが所以で封印指定に指定されていますからね。戦闘力は皆無で
すが、手の内がバレているのは非常に面倒だ」

「仕方ない、焼くか」

「そんな事したら魔術師自体の命が怪しいですし、近隣住民に事態
を知られてしまう。……………まあ、過去証拠を消す為に村一つ焼き払
うのが執行者ですが」

「俺もバゼットもそんな後味の悪い事はしたくないからな、大人しく
捕まえるでしょう」

「最悪、殺害しても良いので。魔術回路と魔術刻印さえ回収できれば、
その技術は遺す事が出来ますから」

今回彼女たちが派遣されたのは、封印指定を受けた魔術師が神秘を
漏洩させる可能性が出て来たからだ。証拠の隠蔽の為に派遣される
事もあるが（寧ろその方が多い）、今回は珍しく執行者として仕事が
回ってきた。

この地域に潜伏している魔術師は植物と対話が出来る秘術を究め
た。植物とは自然の抽象的な存在———つまり植物と対話が出来
るといふ事は、それを通じて自然世界とも会話が出来るという事。世界と
は即ち根源へと繋がる道であり、抑止力の源。更にその秘術を追求す

ればいずれは根源へ辿り着くだろう——そう判断された魔術師は死刑宣告とも取れる封印指定を受けた。

封印指定を受けた直後失踪した魔術師は辺境の地で求道が続けるが、その研究が暴走。彼の魔術の影響を受けた植物たちは人を襲い、獣を殺し、地を犯す害悪となった。無論そんな植物はこの世に存在せず、もしも人間社会に発見され追求されれば神秘の漏洩が心配される——そう判断した時計塔が執行者を派遣した訳だ。

一言で言うなら愚か者に尽きる。折角封印指定に選ばれる程の才能があり、追求できる機会を与えたというのに、それを漏洩が原因で捕らえられるとは。数年とは言わないが十数年あれば地球にすらアクセス出来る才能を、ホルマリ^永ン^久漬^保けで腐敗させられる。同じ魔術師なら同情してしまう。最も犯してはならない禁忌を犯した者にとつては、相応しい末路かもしれないが。

『——ソロソロミツシヨンケンナイへハイリマス。ソナエテクダサイ』

「だ、そうで。いい加減いじけてないで準備しろ」

「むう……………。まあいいです。作戦終了後問い詰めますから」

「そりゃ勘弁して欲しいな——ッ」

——精神のスイッチを切り替えた瞬間。魔力を帯びた茨が伸びてきた。

「ツア!!」

「くっ……………!」

急いでトラックの荷台から飛び降り、体勢を整える。地面を転がってしまった所為でスーツが泥塗れだが関係無い。そんな些細な事を気にしていられる程——茨の追撃は甘くなかった。

鞭は唸り、刺は鋭く、茨は疾い。数十本、或いは数百本の茨がバゼットと彼に降り注ぐ。魔力を帯びているので威力は当然高く、植物故に軌道は不規則。そんな茨が視界いっぱいに迫り来る中——彼
女らの対処は冷静だった。

雄叫びと共に刀を抜刀、一太刀で茨を断ち切る。炎のルーンを瞬時に刻み、幾許かの茨を燃やして拳で叩き伏せる。不意を突かれた形であったが、所詮は意思の無い植物だ。敵意が無いのは厄介だが修羅場を潜った彼らにとって、いなす事は容易い。

茨を切り伏せ、背中合わせの形で陣取る。お互いがお互いの死角をカバーする形であり、最も崩しにくい陣形。後方で炎上するトラックを尻目に、この場に留まるのは拙いと判断して二人同時に走り出した。

「まさか植物に襲われるとはな。B級ホラー映画か何かか？」

「冗談を言っている場合ではないでしょう。明らかに敵対の意思がある——いや、この植物たちは自立している。つまり暴走した植物とは、これ等の事ですか」

「そうになると、もしかしたら封印指定の魔術師は死んでいるかもな。植物と意思疎通を繰り返す内に、植物に自我が芽生え——意思を持った植物共に襲われた。有り得ない話じゃないだろう」

「いえ、流石にそれは……いや、ガイアが接触を拒んだと考えれば、有り得なくはない………のか？」

軽口を交わす間にも茨は迫ってくる。少しずつ前進しながら茨を処理して、魔術師の元へ。逃亡を凶ろうとしたら周囲を包囲している執行者が捕らえるが、領域内にいるのなら自分達で捕らえなくてはならない。また、研究成果である以上茨も何本か回収しなくてはならないだろう。実に面倒だ。

「ああ————本当に、燃やしてしまおうか。丁度抜刀の摩擦で発火する術を身に付けたばかりなんだ、試してみるのも悪くない」
「いや、充分悪いですから。森林火災など引き起こしたら、もしも魔術師が死んでいた場合遺体まで損失してしまいます」

「別に俺にとつて、そんな事はどうだっていいんだがなあ。剣で斬つて、命を賭けて、刹那に生きればそれでいいのに」

「常々思っていたのですが、何故貴方は執行者になったんですか？

戦争屋にでもなればいいのに。寧ろなれ」

「酷い言い様だな。まあ、あれだよあれ————執行者だったら、魔術

師を相手に経験が積めるし」

「……………本当、なんで貴方が執行者になれたか甚だ疑問です」

会話はここまで。これから先は敵の本陣らしく、襲ってくる植物の量は先程とは段違いだ。

命を賭けた戦場を駆ける。片や剣士で片や拳士。背中と命を預けて、魔導を究めた者が居座る城へ攻め込んだ。

——十五時間後。心臓を貫かれ植物に覆われていた魔術師の遺体を回収して、バゼットと明日香鏡治は帰路についた。



「……………ようやく着きましたか。ビジネスクラスは些か肩が凝って仕方がない」

だからと言ってファーストは合わないのだけれど。良くも悪くもガサツである私にとって、少し劣悪な環境の方が良い。凝りを解す為に息を吐いて、背伸びしてから前方を見据える。

ロンドンから成田国際空港を経由して冬木空港にようやく到着した。時間に直すと約半日もの間、座席に座ったままになる。体力自体はそれこそ無尽蔵にあるが、同じ体勢のまま長時間居座るのは中々しんどい。おまけに慣れない空中だ——人間地面に足が付いていないと何だか不安になってくるものである。別に高所恐怖症という訳では無い。寧ろ空を翔ぶのは好きな方だが……………大地に立つ方が良いだけだ。

上空から確認した限り、冬木の街は近代化が進んでいる。高層ビルが数多く立ち上り貿易港からタンカー船が出航する。活気溢れる街——それが冬木市の第一印象だった。最も、彼から渡された資料を信じるのならば聖杯戦争に参加する魔術師の大半は郊外に住んでいるらしく、栄えている中央は舞台となりにくいか。戦場は主に郊

外になりそうだ。

「しかし、地図通りならば殆どが市街地。魔術戦には向かない構造ですわね」

市街戦になった場合、一番有効になるのは小規模の部隊による制圧だ。ゲリラ戦も一応はこなせるのだけれど、明らかにその辺りは彼の領分だと思う。魔術師の癖に科学兵器を利用したゲリラ戦を得意とするのは可笑しいが、まあ彼なら仕方ない。そもそも私も彼も、学問である魔術を学んでいるのに武器や拳を握っている時点で文句は言えないのだけれど。

チャリン、とポケットの聖遺物が鳴る。ケルト神話の大英雄クー・フリーンが着けていたとされるイヤリング。間違いなく最高の遺物であり、ルーン魔術を使う私にとっては縁を感じずにはいられない代物。神代の時代から伝わっている筈のそれは朽ちる事なく、形状を保ったまま現代へ至っている。原初のルーンが刻まれているのだから、それも当然と言えるだろう。

同じ神話の聖遺物を持つている所為か、斬^フり^ラ抉^ガる^ラ戦^ク神の剣を嫌でも意識してしまう。キャリアケースとはまた違う、筒状のケースが震えた。共鳴————したのだろうか？ 宝具と宝具がぶつかり合う瞬間なんて見た事は無いが、どんな現象が起こるのか。私も魔術師である以上、気になって仕方がない。

「——おや」

「……………ア、イヤ……………ガツ……………ザ」

空港から出て街路を歩いていると、それは私に近付いて来た。

それは雀。丸々しく可愛らしい体躯と茶色の羽根。掌に収まり切る程のサイズしか無い雀はとても愛らしくて、思わず笑みを浮かべてしまいそうになるが———この雀は可笑しい。

警戒心がとても高い事で知られている雀が、餌付けもしておらず威圧感を放っている私に近付く筈が無いのだ。……………言っていて悲しくなるが、どうも私には動物たちを恐れさせるオーラが出ているらしい。動物的本能が私の力を敏感に察知し忌避するのだとか。

昔から動物に好かれにくいのは自覚していたが、まさかあそこまで

ストレートに伝える事は無いと思う。堂々と目を見て容赦無い言葉を浴びせるのが彼の悪癖の一つだったりする。私だつて猫や犬と遊びたいのに………ままならない事である。

雀の嘴くちばしにはメモが啞えてある。それを抜き取ると、雀の身体が震えて羽根を広げだした。バタバタと掌の上で暴れる事一分、狂乱していた様子から急転して静まり返る。まるで死んだようにぐったりとして動かなくなった。だが生きている——伝わってくる鼓動はコレが生きている事の証拠だ。

「つまり、機能が入れ替わっている——」

恐らく動かなくなったのも、その為の起動準備。一つの身体に宿した二つのシステムの内、一つを落として一つを起こす。そうするから時間がかかるのだろう。本来多重システムを宿するのは機能ごとの容量が減ってしまう為非効率だとされるが（一つのシステムにつき一体の使い魔を作る方が効率が良いのだ）、こういう類の魔術には疎い者が作つたと考えれば納得出来る。

頭に思い浮かんだ人物が彼なら、きつとこの雀の次なる行動は——

『ヒサシブリダナ、
だめつとに成つていないようであんしんした
ダメツトニナツテイナイヨウデアンシンシタ』

「やつぱり………と言うより、開口一番それとか失礼過ぎでしょう」
『シカタナイ。ツカイマニコトバヤオボエサセルナンテシヨギヨウ、
初めてするもんではな。ツカイマガカツテニンシンキスルセイデ、
ハジメテスルモンデナ。使イ魔ガ勝手に認識する所為で、
語勢が強く成つてしまつて、
ゴセイガツヨクナツテシマウラシイ』

「………つまり私の思考は読み取られている訳ですか」
『マア、
お前の思考を読み取るのは容易い
オマエノシコウヲヨミトルノハタヤスイ』

「ふふふ………！ よろしいでしょう、そんなに私を怒らせたいで
すか」

『マテマテ。ココデハカナナイイノチヲチラセルコトモないだろう』

ノイズが掛かったように不明瞭な声だが——間違いなく、この
使い魔の主は鏡治だ。

行動が見透かされているのは腹立たしいものの、この雀に録音されている音声は過去のもの。過去の彼に怒っても意味が無い。その分現在の彼を思う存分叱るとしよう。

幾ら親しくても、淑女をからかっていたいいものでは無いのだから。

「冗談ですよ、冗談。……………それで、このメモは一体何ですか？」

『開けてみれば判るが、アケテミレバワカルガ、この街の地図だ。コノマチノチズダ。

『中央に書かれていて星印チユウオウニカカレテイルホシジルシ

『それが聖杯戦争の拠点となる場所を示しているソレガセイハイセンソウデノキョテントナルバシヨヲシメシテイル』

「此処ですか。確かエーデルフェルトが第三次聖杯戦争で使用した拠

点と聴きましたが、その……………大丈夫なのですか？」

『その点は安心していいソノテンハアンシンシテイイ。一ヶ月前からイツカゲツイジヨウマエカラ

セイソウシテイイル』

「ありがとうございます」

それだけ言って、使い魔の雀は無言で飛び立った。進んでは視線を此方へ寄越す辺り、どうやら「付いてこい」と言っているらしい。ナビゲートを付けてくれた事を喜ぶべきか、地図だけでは目的地にも辿り着けない間抜けと判断されたと取るべきか……………。

文句を言っても仕方がない——大人しく彼の案内に従うとしよう。下手な意地を張って彷徨ってしまったえば目も当たられない。

新都を越え橋を渡り、辿りついたのは深山町。閑静な住宅街が広がる中でも、更に静かで目立たない場所にそれはあった。

一言で言うなら幽霊屋敷。外壁などに損傷こそは見られないが、百年以上経過した建物故に古さが目立つ。洋風の建築方法に加えて魔術が掛けられているから、幽鬼の類を連想させるのだろう。宝石魔術を扱い豪華絢爛な生活を好むエーデルフェルトらしく、この屋敷には優雅さを感じさせる何かがあった。

そんな幽霊屋敷の中に二つ、尋常ならざる気配がある。片方は感じ慣れていて、片方は初めて感じるものだが——性質が人間のそれではない。一瞬でその正体は理解できた。

英雄。生前の偉業によって死後も語り継がれる偉人。

チャリン、とポケットのの中のイヤリングが鳴った。

「……………お邪魔します」

古い洋館だというのに埃臭さは全く感じなかった。一ヶ月前から清掃していたという、彼の言葉は本当らしい。てつきり適当に掃き掃除をして終了、なんて言う雑い仕事を想像していたのだが……………予想以上に几帳面だったらしい。彼の新しい一面が覗かれた。

彼らの気配があるのは一階ではなく二階だ。久し振りに対面する事に緊張しているのか、心なし心拍数が多い。身体も火照っている気がする。深呼吸でそれ等を整えて、ポケット越しにイヤリングを撫でて——二階へ乗り込み、扉を開けた。

入って見えたのは桜。日本で育てられ、彼に写真で一度だけ見せて貰った桜がそこにはあった。

次に見えたのは群青。いつもと変わらない黒髪に落ち着いた印象の着物が、憎たらしい程似合っている。

「お久し振りです、鏡治」

「お久し振り、バゼット。——いや、我が同盟相手マクレミツと呼ぶ方が良かったかな？」

「いえ、バゼットで構いません。貴方に敬語を使われると吐き気がする」

「……………了解」

二年振りに、私は鏡治と再開した。

第5話

二年振りに出会ったバゼットは、相変わらずスーツ姿だった。

女性としては長身の部類に入る彼女は男性モノのスーツを愛着しており、体格の良さもあつてか時々男性と間違えられる事もある。実際、存在感を醸し出している胸部を除けば体格は男性のそれであり、プロボクサーの拳の速度時速四十キロの倍、時速八十キロを叩きだす筋肉も持っている。……………最早ゴリラじゃないだろうか？

「……………ふう。取り敢えず一通りの魔法陣は描けましたが、本当にこの程度の規模で良いのですか？」

「ん、ああ。自分も疑問に思ったんだが、召喚自体は聖杯が行ってくれるからな。マスターは召喚のきっかけになる魔法陣を描けばいいだけなんだ」

「成程。……………しかし、そう考えると聖杯というモノは未恐ろしい」
現在、俺とバゼットが居るのは冬木市新都にある姉妹館。此処は今から七十年前、フィンランドの名門エーデルフェルトが第三次聖杯戦争に参加する際、別荘として建築された館だ。宝石魔術を扱う金持ち故に外観や内装は豪華絢爛そのものだったが、エーデルフェルト敗退を機に破棄された。所有者自体はエーデルフェルトになっているが、管理人すら居らず正に幽霊屋敷と化している。

当時は優雅だったであろうこの館も、七十年という歲月によって完全に腐敗が進んでいた。此処をバゼットの拠点にすると決めた日から掃除を続けていたが、初日なんて野良犬が入り込んで室内を荒らしに荒らしまくっていた。当然だが溜まっている汚れも相当なもので、家事など殆どしない自分が掃除を終了させるまでに一ヶ月掛かった程だ。無駄に広い所為で掃除するのも一苦勞だった。

もしも生きてロンドンに行けたなら、ライネスを通じてエーデルフェルトの現当主に文句を言つてやる。

「まあ何せ、千年もの間純血を守り続けてきた狂気の魔術師と、ほぼ最高レベルの霊地を保有する魔術師、サーヴァントなんていう人類の守護者のシステムを作り出した魔術師の共同開発品だからな。規格外

も規格外、正しく聖杯と言うネームバリユーに負けていない代物だろう。

ただ、贋作ですらこれなんだから——本物がどんな代物なのか、考えたくない」

「彼の聖人の血液を受け止めた器、円卓の騎士達が追い求めた杯、かの第三帝国が求めた聖遺物。それを形容する言葉は色々ありますが、その正体までは判明されていません。偽物だろうと万能の願望機を名乗れるのなら、本物を手にした暁には宇宙を掌握出来るのかもしれないね」

「流石にそこまでは……いや、有り得るな。SEIIBUTSUなら何が起こつても不思議じゃないから困る」

「何ですか、そのジャパニーズジャみたいなノリは」

赤毛の絨毯を剥ぎ取り露出させた床にバゼットの魔力を編み込みながら魔法陣を描いていく。自分が沖田を召喚した時と同様、結界の作り自体は簡素なものだが——英霊を呼び出す為の孔あなとしては充分。

バゼットが聖遺物として扱うのはルーンの刻まれたイヤリングだった。何の英霊の遺物かまでは教えてくれなかった(同盟相手にも自身のサーヴァントの真名は教えないようにしている)が、事前情報のケルト神話系列の聖遺物が正しいなら大分絞り込める。剣や槍、馬車を使う英雄は多くいても魔術を扱う英霊は存外少ないものなのだ。ケルト神話でルーンを愛用したのは僧であるドルイド達だ。栄華を誇った騎士達は主に武器を取って戦った。それ故騎士の中で魔術を知っている者は居ても使える者は極々僅かだった筈だ。………まあ、イヤリングに刻まれたのが加護のルーンだったら、別の術者が居る可能性も否めないんだけどさ。

自分の知っている中でルーン魔術を扱ったケルト神話の英雄は二人居る。太陽神ルーの息子にしてケルト神話随一の英雄クー・フーリンと、その師匠であるスカサハだ。どちらも強力な英霊であり、魔槍ゲイボルグを扱う槍兵。

幸いなのは同盟相手である事と禁戒ゲツシユがある事か。ゲツシユさえ見

破れば勝利に一歩近付く事だろう。

「さて、雑談はここまでだ。これからは一気に召喚に入るぞ。聖遺物は召喚陣の中央に置く」

「一応渡された詠唱は覚えましたが……その、本当にこれで大丈夫なのですね？」

「大丈夫だつて。実際お前も感じただろう？ アサシンを」

「彼女ですか——確かにあれ程の達人を私は見た事ありません。正直に言うと、一対一では勝てる気がしない」

「いや、腕前がどうこうとかじゃなくて、俺と彼女に繋がれたパスの事だったんだが……」

「え？ ——あ、ええ、ああ、それは勿論、はい。しっかりと見ましたよ、しかとこの目に焼き付けましたとも」
「……………」

この脳筋魔術師、サーヴァントを知的好奇心とかじゃなくて腕前で見てやがった。

思わずジト目で彼女を睨む。気まずそうに顔を逸らすバゼットだが、動揺が隠しきれていない。

『あー……………マスター。そろそろ月が出ますし、今日中に召喚するなら急いだ方が良いのでは？』

「そ、そうだな。よしバゼット、聖遺物を準備しろ」
「はっ」

一瞬何とも言えない微妙な空気が二人の間に流れるが、空気を見かねた沖田の念話によって立て直す事が出来た。ありがとう沖田。

バゼットがポケットからイヤリングを取り出し、召喚陣の中央にゆっくり置く。その動きには聖遺物に対する慈しみが見てとれた。バゼットが扱う現代に残りし宝具——フラガ・ラックはケルト神話の武器だ。出典が同じ事もあって、恐らくフラガ・ラックと同じように大事に扱っているのだろう。武器として消費してしまおうと考えている自分とは正反対だ。

聖遺物を置いた次の瞬間からバゼットの纏う空気ががらりと変わる。いつもの見慣れた可愛らしい少女は、この瞬間に非道にして冷血

な魔術師に変わった。

ルーンの刻まれた革手袋を付け、魔術回路を起動させる。現役執行者としての威圧感が放たれ、それによって闘争精神が刺激される。ああ………ダメだと判っているのに、殺気立ってしまうのが止められない。

『マスター。屋上に居ても判る程殺気が漏れていますよ』

「ん。済まないバゼット、ちよつと興奮してきちゃった」

「相変わらず血の気が多いですね。私が召喚するまで抑えておいて下さいよ」

今度は俺がバゼットにジト目で見られてしまう。解せる。

「さて——では、開始します」

目を閉じて精神統一。言葉に魔力を乗せながら詠唱を綴る。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

室内を満たす魔力とエーテル。その発生源はバゼットであり、聖杯と繋がった召喚陣だった。この光景を見るのは二度目だが、吹き荒れる魔力の量はかなりのもの。針の穴程度から漏れる魔力がこれなのだ——聖杯本体は、一体どれ程の魔力を保有しているのだろうか。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。」

繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する」

彼女の薄桃色の髪が揺れる。左腕に刻まれた令呪が存在を主張するが如く光る。剣が向かい合うような形状の令呪は、まるで彼女のフラガ・ラックのようでありお互いを傷付けあうようだ。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

エーテルが集結し肉体を創る。霊体の身体に魔力が宿り、英霊の型を象つていく。

「汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ——」

一瞬——まるで獣のような、鋭い闘気が自分に当てられた。

「天秤の守り手よ——！」

一際大きな閃光と暴風の後——バゼットのサーヴァントが現界した。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。パスからするとお嬢ちゃんが俺のマスターのようだが………ならテメエ、一体何者だ？」

俺に対する、最大級の殺気と共に。



星空が広がる空に浮かぶは、饅頭型の白い雲。月光に照らされたそれを目で追いかけてつつも周囲への警戒は怠らない。

現在、私が居るのはこれからの拠点となる幽霊屋敷の屋上である。この屋敷はマスター曰く半世紀以上の歴史があるそうで、人の手入れを受けていない植物達が目一杯蔓を伸ばしていた。

屋敷の内部は風化が進んでいたが、屋上はそれほど酷いものではなかった。元々屋上は雨風に晒される為頑強に作られており、七十年という歳月を経ても立派に存在している。木材が腐る——そんな事故も無く、屋上で戦闘を行っても五分は持つ耐久力があるだろう。

私の召喚主であるマスター、明日香鏡治あすかきょうじは同盟相手であるバゼット………浦賀・幕の内？ とかいうエゲレス英人人の英霊召喚を補助している。

今の世の中では男性が着衣する衣服を身に付けていたのが印象的で、薄桃色の髪と綺麗な白い肌をしていた。しかし、私が感じたのはそんな華奢な印象ではない。彼女と目を合わせたのは十数秒程度だ

が、その程度で判る程の力強さ。恐らくは私のマスターと同等程度の技量に驚いたのだ。

マスターの実力は相当なものだ。剣の道に生きた修羅のように、人への容赦を感じず殺人を徹底して行える畜生。それと同等の事を、確かな意思を持って行える……………その意思の強さは、充分脅威に値する。

「彼女が同盟相手に助かりました。真つ向勝負でサーヴァントを加えて二対一になれば、勝てる気がしませんからね」

思わず弱気な発言が飛び出してしまうのも仕方のない事なのだ。

マスターが教えてくれた彼女の必殺技————斬り決る戦神の剣フラガ・ラックは、後出しの筈なのに因果を逆転させて先手となり、相手の必殺技を潰すという宝具だ。現存する宝具を扱っている事にも驚くが、何よりも恐ろしいのがフラガ・ラックの必殺技潰しだろう。

私の無明三段突きも当たらなければ意味が無い。そもそも発生しなかった事にさせる彼女の宝具は、我々サーヴァントにとって鬼門に等しい。倒す術は必殺技以外で倒す事だが……………それをさせないのが彼女本人の技量である。

一瞥しただけで把握出来た実力を考えると、アサシンである私が正面から撃破するのは相当困難の筈。マスターとの連携が必要不可欠であり、いかにして相手サーヴァントの助力を防ぐかが鍵となってくるだろう。

『いや、腕前がどうこうとかじゃなくて、俺と彼女に繋がれたパスの事だったんだが……………』

『え？———あ、ええ、ああ、それは勿論、はい。しつかりと見ましたよ、しかとこの目に焼き付けましたとも』

『……………』

……………どうやら下は下で盛り上がっているらしい。

下衆の勘繰りかもしれないが、マスターとバゼットは特別仲が良いように思う。今までマスターが他の人間と会話するのを一度しか見た事無いが……………少なくとも、私に対する話し方よりも友好的なのは確かだ。

まだ十日程度しか経っていない私よりも数年の付き合いである彼女と仲が良いのは仕方ない事だ、仕方ないのだが――

――自分のサーヴァントをほっぽり出して、他の女性と戯れるのは許せない。

「あー……………マスター。そろそろ月が出ますし、今日中に召喚するのなら急いだ方が良いのでは？」

声色だけ見れば善意からの発言のように見えるが、その実内心に渦巻くのは黒い感情だった。

嫉妬……………ではない。只、敵になるかもしれないマスター相手にそこまで交友する必要は無い。それだけである。

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』

私の感情を他所に、サーヴァント召喚の儀式が始まった。

マスターを通じ念話という形で詠唱が聞こえてくる。誰しもそうだが、人間は必ず大きな出来事をする際に隙が生まれる。特にサーヴァント召喚のような大魔術ではそれが顕著に現れてしまう。そんな隙を突こうとする外敵が居ても可笑しくない――故に、それを

警戒するのが私とマスターの役目なのだ。

『閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。』

繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する』

周囲五百メートル内に敵影らしき姿無し。この場に在るのは私と夜空に浮かぶ月のみ。吹き抜ける風と魔力だけが音を発していた。

『――告げる。』

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者』

静かな夜に魔力が吹きすさぶ。それと同時に、召喚陣の中から魔力と闘気――そして殺気が溢れ出た。

拙い、と呟いた刹那。霊体化を駆使し壁を貫通、マスターとバゼットが居る室内へ突入した。

『汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ——天秤の守り手よ——！』

「間に合え……………」

◇ ◇ ◇

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。パスからするとお嬢ちゃんが俺のマスターのようだが……………ならテメエ、一体何者だ？」

目の前に現れた青タイトの男——ランサー槍兵の英雄が放つ殺気は本物だ。

過去の時代……………今よりも純度の高い神秘が存在し、人間が強大だった時代に生きた彼らは現代人の数倍強いだろう。魂の質と言うべきか、それが根本から異なるのだ。

現代のように何もしくとも充分生活出来る世の中ではなかった神代の時代、人間は強くあらねば生きていけなかった。その為に力を蓄え、種としての重みを増してきたのだ。それが薄くなってしまう現代人とは比べ物にならない程の威圧感と殺気。これが神代の時代に生きた英雄の圧——。

心地よい。まるで住みづらかった地上から海に還ることが出来た深海魚のように、呼吸がスムーズに出来る。

「……………ほう。俺の威圧を受けて尚笑うとは、テメエ中々やるな」「お褒め頂き誠に恐縮。しかしながら、この程度で怯むとは思っていないかっただろう？」

「ハッ、違いねえ——！」

室内を満たす殺気の濃度が増す。肌は泡立ち、自然と抑えきれない闘気が溢れ出てしまう。

冷静になって考えれば完全に彼が同盟相手のサーヴァントである事を忘れていたが——まあ、それも些細な事だ。今はどうでもい

い。

「フツ——！」

「シヤアツ！」

槍兵の名に相応しい真紅の魔槍を具現化させ、凜猛な笑みを浮かべて襲いかかってくるランサー。それに応えるように腰の加州清光を抜刀し、槍と刀が交わろうとした——その瞬間。

「収めなさい、ランサー。こんな狭い室内では貴方の槍は充分に振るえませんが、そもそも彼は味方です。戦う道理は無いと思いますが」「マスターもです。これから味方となる相手と争って何かあるのですか？ 確かに時には衝突も必要でしょうが………今はその時ではありません」

魔槍はバゼットに掴まれ停止し、刀は沖田の言葉で静止した。

言葉を投げかけられた事で沸騰していた頭が急速に冷えていく。考えてみれば可笑しな行為をしたもので、所詮ランサーからしてみれば挨拶替わりの殺気をスルー出来なかつた俺の落ち度だ。

ランサーと一度視線を合わせ、大人しく武器を仕舞う。勇気を出して戦闘を止めてくれた彼女たちには感謝しなければならぬ。もしもあそこで止めていなければ、一戦交えていただろう。勝敗は………七：三でランサーの勝利だろうか？

「いやあ、悪いな。結構できそうなヤツだったからよ、つい好戦的になっちまった」

「此方こそ済まないランサー。アンタの事を味方だと判っていたのに、調子に乗ってしまった」

仲直りの意を込めて握手を交わす。力強さと共にカリスマのようなモノを感じて、英雄の本質をまじまじと魅せられた気がした。沖田は、ね。どちらかと言うと可愛さで周囲を従えるタイプだと思う。

「……………」

「……………」

「って、そこ。なんでそんな意外そうな顔をしているんだ？」

「いや……………だって、先程まで一触即発の空気だったのに握手して

いるんですよ？ 流石の私もそれは出来ませんよ」

「アサシン、彼はそういうものです。切り替えが早いというか、異常なのです」

「慕われてるねえ」

別にそこを指摘されるのは良いけどさあ……………そのしたり顔止めろ、ランサー。

第6話

この古い館には似つかわしくない、デジタル時計のアラームが部屋に響いた。

流し目で時計を確認すると、画面の電子表記はA・M2:00になっっている——あの衝突から既に三十分程経過したようだ。時間が経つのを早く感じているのは戦闘の猛りが治まっていないうか、現在進行形で土下座をしているからだろう。

土下座という姿勢には比較的慣れてる。土下座の姿勢とは要するに正座である——うちの家系は魔術師の癖して無駄に愛国心があり、幼少期は食事の際、常に正座だったのを憶えている。足の痺れも慣れの御蔭でほとんど無く、たとえ一晩中この姿勢でも耐え切る事が出来る。

だが。耐え切れるからと言って、この姿勢を長時間続けたいとは微塵も思わない。

何故なら、土下座とは正座と違い謝罪を表している。つまりこの姿勢を取っている限り、自責の念が溢れて仕方がない。

「マスター」

「はい」

軽く現実逃避していることも、鬼の新撰組隊長にはお見通しのようだ。

こんな状況になっている原因——それは俺が行ってしまった軽率な行動にある。

同盟相手のサーヴァントへの攻撃。他のマスターからすれば無謀であり無茶な行為だが、それを可能に出来る程度の実力は有している………そんな事実は沖田との鍛錬で判っていた筈なのに、つい自分の戦闘欲求に身を任せてランサーに斬りかかってしまった。

勝てる算段すら無く、勝てたとしても倒した相手は同盟相手のサーヴァント。正に最悪の愚行と言うしかない。

一応喧嘩両成敗としてバゼットと和解は済んでいる（そもそもバゼットは怒っていなかったのだが）ものの、この調子ではスムーズに

話し合いは出来ないだろうという判断の下、一旦別室で頭を冷やすことになった。

そして部屋に入った瞬間、土下座を強要され今に至る。今まで「可愛い」だったり「癒し」だったり、柔らかいイメージを持っていた沖田の眼が絶対零度だったのは驚いた。まあよくよく考えれば刀を握っている時はあんな眼をしていたのだが。

「大体ですね、マスターは命知らず過ぎます。冷静になって考えてみれば、私が召喚された日に刀を交えましたが——英霊との鍛錬など、身体が壊れていても不思議ではありません。

あの時は私もマスターも手加減をしていませんでした。一撃でも当たれば損傷は免れなかったでしょう。木刀ですら我々にとっては十分凶器になりえるのですよ?」

「それぐらい判っているけど……」

「いいえ、判っていません。いいですか、まずマスターは——」

この話題を繰り返すのは一体何度目だろうか。いい加減聞き飽きてしまった。

沖田の説教は主に二つ。まずは友軍へは攻撃するな——これは当たり前だろう。まあその程度のことでも守れないのが俺なんだが、ここまでしつこくされたら決別する時以外斬りかかるような真似はしないだろう。最悪バゼットと契約でも交わせばいいかもしれない。羊皮紙ならば持ち込んだ記憶がある。

そして次が重要なようで、命を大切にしろと耳にタコが出来る程言われていた。

……どこかで聞き覚えがあると思えば、最近橙子にも電話越しに伝えられた言葉だった。俺の周囲の人間はどうも俺という人間は自爆特攻好きの博打野郎とでも思っているのだろうか? 一度そこから辺は真面目に話し合わねばならない。

正直に言えば、そんな刹那的に生きているつもりはない。今まで死地で生き残る為に刀を振るい、敵を殺し、屍を踏んで此処に居る。だが、そもそも死地に飛び込んだ理由はなんだったか。

強くなりたかったから? それもあるが、結果論に過ぎない。

斬りたかったから？ それならば魔術を使って一般人を斬殺しているだろう。

死にたかったから？ だったらさっさと自害している。

沖田のありがたい説教も耳から通り抜けていく程、思考はどんどん深くなっていく。余分な音は次々と遮断されていき、集中力が高まり始める。

この思考は言わば自分の起源を探る事。起源が魔術的にどんな意味合いを持つているのか——それを知っている以上、これはあまりすべき事ではない。

起源覚醒と呼ばれる現象は何度か耳にしたことがある。己の起源………自分の方向性を自覚した結果、それを体現する狂人となるらしい。

暴食が起源ならば食い散らかし、自傷が起源ならば自分を傷つけ始める。

起源覚醒の術式を保有している魔術師ならば人為的に発生させる事が出来るが、ごく稀に自力で起源を自覚した事例も存在する。俺も武人の端くれである以上、集中力は常軌を逸していると言って構わない。そこに魔術師特有の盲目的なまでの視野の狭さが付け加えられると、最早手が付けられない状態だ。

「——ということですか。マスター、解りましたか？」

「ん、ああ、おう。勿論了解した」

「……………はあ、まあいいでしょう。私も大人げない部分がありましたからね」

「まあ今回の件は俺が明らかに悪いからな。……………そうだ、何か一つ要望は無いか？ よっぽどの事以外なら叶えるぞ」

思い返してみると、俺は女性に対して謝罪するときには常に金で誤魔化している気がする。橙子は守銭奴なので問題ないとしても、バゼットには超巨大ビックパフェ（一度食べてみたかったらしい。結局はファーストフードに落ち着いたが）やオーダーメイドのスーツなど………金が有り余っているので出来る芸当だが、これでは只の成金じゃないか。

俺の葛藤も知らないまま、沖田は神妙な顔のまま考えている。そこまで悩むような話だろうか——まあ、誰しもこんな話題にぶつかれば悩むものか。

「そ、その………えっと、マスター？ 本当に叶えてくれるんですね？」

「余程の注文じゃなかったら、な。流石に鞍替えとか自害とかは受け付けないぞ」

「別にそんな事頼みませんから。………うーん………あ………でも——」

「——？」

「決まりました。えと………」

照れているのか、顔を僅かに赤く染めている沖田。幾ら清掃や整備をしているとはいえ、流石に電気は引けなかった故にこの部屋には灯りは無い——その筈なのに、彼女の顔ははつきりと見えた。

月光………ではない。恐らく自然と目が引き付けられてしまう程、彼女が魅力的だったのだろう。

「ランサーのマスター………バゼットでしたっけ。彼女と、その、出来るだけ会話しないようにして欲しい——です」

「会話しないようになって………同盟相手なんだから作戦会議ぐらいするぞ？」

「別にランサーのマスターとしての彼女は構わなくて………ああ、自分でも何を言っているのか判らなくなってきました………」

兎に角、私が認めた時以外話さないで下さい。判りましたか!？」
「お、おう」

剣幕に押されてつい返事してしまったが、冷静に考えて拙い気が。これではまともにバゼットと意思疎通出来なくなってしまう。………まあ沖田もそこまで鬼ではないだろう。

——と。

ゴンゴン、と部屋の扉がノックされる鈍い音が響いた。

『バゼットです。そろそろ二時を回りました——いい加減、ブリーフィングを行いましょー』

「ああ、了解した。すぐ行く」

沖田に目配せをし、加州清光を腰に差して部屋を出る。武装している事を失礼だと思ふような精神は俺にもバゼットにも無い。どうせお互い全身凶器——拳だけで人間を殺せる存在だ。刀を持つのが銃を持つのが、あまり関係無い。

「さて、資料はどこにあったかな……………」

懐に入れてあったメモを探しながら廊下を進む。

まずはどの陣営から壊滅させようか——頭の片隅では、その事がグルグルと渦巻いていた。



「まずは自己紹介から。俺の名前は明日香鏡治あすかきょうじ、呼ぶ時は鏡次が良い。所属はバゼットと同じく魔術教会、得意な魔術は『強化』と『解析』——担当は前衛だ。これからよろしく頼む」

「アサシンです。ステータスは貧弱ですが、技術で補います。因みに隠密行動はあまり向いていません……………前衛です。よろしくお願ひします」

「次は我々ですね。バゼット・フラガ・マクレミッツです。ルーン魔術を得意としています。所属は彼が言った通り魔術教会で、主に拳で戦います。当然ながら前衛です」

「……………あー、ランサーだ。偵察から戦闘、殿まで熟してやるが……………得意なのは前衛で戦うことだ。」

なんつーか、見事に近距離戦闘のヤツばかり揃ったな」

ランサーが思わずそう呟いてしまう程、鏡治とバゼットのアサシン・ランサー陣営は偏った戦力だった。

なんせマスターを含めた四人全員が刀や槍といった近距離武器、そして拳で戦うのだ——英霊であるアサシンとランサーは兎に角、本来ならば後衛でサーヴァントの補助をする筈のマスターまでもが

前線に出るのが可笑しい事に彼らは気付いていない。

アサシン……………沖田総司とランサーは聖杯の知識によつて聖杯戦争がどのようなものか理解しているが、沖田はそもそも後衛に下がる事を提案するつもりはさらさら無く、ランサーは自身の槍を止めたバゼットと立ち向かつてきた鏡治を評価している。わざわざ強大な戦力を潰すつもりは無かった。

「最悪俺は後衛に回れる。ゲリラ戦ならばお手の物だ———もつとも、前回の聖杯戦争にてテロ紛いの行為を行ったマスターが何人か居る所為で、今回の聖杯戦争で通用するとは断言できないが」

「魔術師殺し……………衛宮切嗣えみやきりつぐですか。彼が参戦する可能性は？」

「無いとは言い切れない……………が、可能性は低い。もしもあの魔術師殺しが参戦しているのなら、俺が仕掛けた陳腐な代物なんぞ看破されているだろう」

彼らが話し合っている議題———それは聖杯戦争におけるこれからの方針だ。

時計塔に居る協力者エルメロイ家や金に物を言わせた調査によつてある程度のマスター、サーヴァントは絞り込んでいる。聖杯戦争が開始される前の段階で鏡治とバゼットを含めれば四人まで名前すら看破しているのだから、時計塔の調査力は侮れない。

明日香鏡次。サーヴァントはアサシン。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。サーヴァントはランサー。

遠坂凜。サーヴァントは不明。

アトラム・ガリアスタ。サーヴァントは不明、しかし触媒には竜の牙を扱う模様。

これ等が现阶段で把握できているマスターとサーヴァントの情報である。これ以外にもアインツベルンのマスターが現地入りしている事（マスター、サーヴァント共に確認できていないが拠点の結界が働いている事から判断）や、間桐家が触媒の準備を進めていることなど———。細かい事で言えばその辺りまで調査できていた。

しかし逆に言えば残り一人のマスターを探し出せていないのだ。おまけに調べた内容も穴が多く、補完する事柄も多々ある。

そして鏡治とバゼットが最も恐れている七人目のマスターは、前回の聖杯戦争にも参加した魔術師——衛宮切嗣だ。

彼の汚名や悪名は十年（彼が活動していた時期で言えば二十年にもなる）経った現在でも語り継がれており、「一人の魔術師を迎撃する為に旅客機を撃墜させた」や「彼の銃撃で倒れた魔術師は二度と魔術を扱えない」などの噂が流れている人物。その手腕は悪辣にして的確であり、策略や謀略を得意としない鏡治やバゼットからすれば最も当たりたくない魔術師なのだ。

とはいえ、彼も既に三十を超えている。魔術は強化されているだろうが、肉体年齢は此方が優っている筈だ。それならば一太刀浴びせれば勝てる………鏡治はそう考えている。

「まあ待てよお二人さん。このまま架空の相手を前提に話を進めても埒が明かねえ——次に行こうぜ」

「……………そうですね、ランサーの言う通りです。まずは把握できている範囲の事から片付けていきましょう」

サーヴァント達の助言もあり、議題の一つであったマスターについての話は終了した。

勿論これだけではない——話し合う内容は多々ある。「では次の議題だが……………」

鏡治は顔色を伺うようにバゼット、沖田、ランサーへ視線を移していく。それに訝しげな視線を送る者は居なかった。全員が一瞬で、彼が重大な事を提案すると理解したからである。

「——陣営を一つ、早い段階で潰しておきたい」

考えるように目を閉じたのがバゼット。

好戦的な提案に思わず口角を上げたのはランサー。

沖田は予め聞いていたのか、特に反応は無く黙って鏡治の顔を見ている。

「……………理由を聞かせていただいても？」

「不意を突く——と言えば聞こえは良いだろう。しかし単純に準

備期間を設けさせると厄介なサーヴァントが居るから、それを潰すだけだ。一つの陣営なんて言ったが、実際は決まっている」

「キャスター魔術師か」

「ご名答」

キャスター。聖杯戦争にて召喚されるサーヴァントのクラスの一つ。

クラス固有のスキルは『陣地作成』と『道具作成』。魔術師のクラスと言われるキャスターは、自らの牙城にして拠点である工房を作り出せる。それを補助するのが『陣地作成』であり、そこで生産された魔力を用いて道具を作るのが『道具作成』なのだ。魔術師という特性上、後方支援に向いているクラスと判断して良いだろう。

陣地を作り出すというスキルは、時間を掛ければ掛ける程厄介となる。工房とは魔術師の腹の内部にして心臓である——当然ながら、外敵への行動は排除以外存在しない。聖杯戦争終盤になればキャスターを落とすのに数名のサーヴァントを駆り出す必要すらある。それをアサシン陣営は危惧しているのだ。

「悪くない意見だとは思いますが。しかし現状、どのマスターがキャスターを召喚しているのか判明していません。偵察などを含めると、それなりの時間を要しますね」

「二応目星は付いている。」

恐らく御三家はキャスターを召喚しないだろう」

「何故断言できる？」

「キャスターは魔術師が多い。魔術師とは内向きで自分勝手、そして利益を尊重する生物だ……。もしも万が一、彼らと仲違いをした時。待っているのは主人と従者の潰し合いだ。そのリスクを良く知っている御三家は間違いなく召喚しない。」

後は……。単純に魔術師って自信家だから、もう一人の魔術師は必要無いと考えてしまいがちなんだ」

主観混じりの説得力の薄い根拠——彼は軽々しく口にしていくが、実際はこの陣営の未来を左右する出来事だと言って可笑しくないので。

聖杯戦争はまだ始まっていない。自分たち以外のマスターやサーヴァントは目撃しておらず、また監督役である教会の神父からも通知は無い。言ってしまうえば今は準備期間なのだ………この段階で暗殺者と槍兵が同盟を結んでいる事が露見すれば、対策を練られてしまう可能性が高くなってしまう。

逆に言えば、自分の陣営に目を向けているこの隙がチャンスなのかもしれない。以前からこの土地に拠点を構えている御三家以外は、バゼットのようになんて工房を作っている最中だろう。ならば魔術師の眼になる使い魔は少なく、警戒レベルも低い。

………デジタル時計の時刻は三時に差し掛かっている。

長針が十二を回ろうとした時———ようやくバゼットが、重々しく決意を秘めた声色で告げた。

「やりましょう」

「……………その言葉を待っていた」

サーヴァント達の顔を伺っても、否定するような様子は見られない。

全員賛成である事を知って安心したのか、鏡治はソファに深く沈み込んだ。よく見れば頬には汗が伝っており、彼がこの話題を通すのをどれだけ心配にしていたかが見て取れた。

「あれだけ大言吐いておいて悪いが、もしかしたらマスターじゃないかもしれない。それだけは了承してくれ」

「構わん。それよりも、どのマスターを襲撃するか教えてくれ」

「それは私も気になります。……………その様子だと、何処を討つか決めているのですね」

「ええ」

彼が落としておきたいのはキャスターのサーヴァント。キャスターを召喚する危険性をよく知っているであろうアインツベルン・間桐・遠坂の御三家は優先度は低く、残り一人のマスターは判明していない。

そうになると、狙っているマスターはたった独り――！

「アトラム・ガリアスタ。中東からやって来た七光りを、竜のサーヴァントと協力関係を得られる前に討つ」

聖杯戦争。残りマスター七人、残りサーヴァント七騎。

第7話

エレベーターから見える夜の新都を眺めながら、アトラム・ガリアスタはほくそ笑んだ。

冬木の中でも特に発展しているのがこの新都である。その中でも一際高いビルに彼は居を構えている。高い場所から見下ろす景色は絶景の一言であり、またストレスが消えていくようだった。

彼は魔術師である。歴史こそは浅いものの、若くしてある程度の実力と圧倒的な財力を保有している。

その起源は百年前——彼の先祖が魔術の知識を金で買ったことから始める。石油販売によって莫大な経済力を有しているガリアスタ家は、本来隠匿されるべきの魔術すら金で買収した。当時はあくまで上級階級の嗜み程度としか考えられていなかった魔術だが………それに活路を見いだしたのがアトラムである。

彼は石油に代わるエネルギーとして、人体を用いたエネルギー錬成に取り組んだ。数年に及ぶ試行錯誤の末、それは成功。最新鋭の実験器具という科学の力を借りる事により、本来ならば一ヶ月程掛かる儀式を一瞬で行えるレベルまで上達できた。

実力は付けた、ならば後は結果を残すべき——そう判断したアトラムが、近々極東で行われる聖杯戦争に食いつかない訳が無かった。

万能の願望器と呼ばれる聖杯を協会に持ち帰る。そんな偉業を成せば、時計塔の中核にすら入り込めるかもしれない。最低でもロードの名か『色』を与えられるだろう。

決断すれば即行動に移せるのが彼の利点だった。即座に金を存分に振り撒き、幻想種の頂点にして最強の生物——竜に關係する英雄の聖遺物を集め、聖杯戦争が行われる冬木の土地に工房を拵こしらえた。

彼が冬木に入ったのは十二月の終わり。後は今日に至るまでにひたすら工房を改造し、送られてくる聖遺物を待った。

——そして一月の中頃、召喚は行われた。

聖遺物は竜ドラックルの紋章が刻まれた竜の牙。呼び出されたのは裏切りの魔女と称される魔術師キャスター——コルキスの王女・メディア。

彼は忘れもしないだろう。あの夜の事を、あの工房での事件を、あの魔女が発した言葉を——！

思い出すのは先程まで行われていた神父との密会。あの胡散臭くも威厳のある神父の人格は好きになれそうにないが、利用価値があるのならそんな事はどうだっていい。

役立たずのサーヴァントを放棄でき、尚且つ監査役からもお墨付きをもらう程のサーヴァントを手中に治める事が出来るのだ——
これから彼女が味わうであろう地獄と、待っている輝かしい勝利を思うと、笑ってしまうのも仕方が無かった。

——正直な所、アトラムはメディアが邪魔なのだ。

キャスターとして召喚された彼女の宝具は『契約を断ち切る』ものであり、彼が望んでいた『竜を呼び出す』ものでは無い。また、自慢の工房が生贄を六人使用して創り出した魔法石を、無詠唱かつ何もない状態から数倍の大きさのモノを創り出す。魔術師としての自尊心はボロボロだった。

邪魔なものは排除するのが人間の道理であり、魔術師の性である。そこで彼は聖杯戦争の監査役にして運営役である教会へ駆け込んだ。万が一、新たなサーヴァントと再契約できる可能性は無いか………はつきり言うとは期待していなかったが、予想と反して教会の神父はサーヴァントには空きがあるという。彼の言いぶりではメディアを始末すれば新たなサーヴァントを紹介してくれるらしい。

本来の目的——ではないが、自分と同じく教会から派遣されたというマスター………確か同僚の話では槍兵ランサーのマスターへの手紙を神父に渡し、工房へ帰ってきた。

手紙の内容は「キャスターを始末して欲しい」というもの。同じく派遣された仲間なのだからその程度はして欲しいし、自害させる分の令呪が持ったない。彼女の契約を断ち切る宝具を封じる為に令呪を一画使用してしまっているのだ、残り二画は大事に取っておきたい。

数秒でエレベーターは工房のある階層へ辿り着く。出来ればワインを味わい女でも抱いて寝たいものだが——そんな怠惰を許される程、魔術師は甘くはない。今日はまともに魔術を行使しておらず、魔力は溢れんばかりにある。キャスターに杜撰に扱われたものの、彼の魔術工房はそれなりの性能を誇る。一個や二個、魔法石を作っておくのも悪くは無い。

そうと決まれば、足は動いていた。すれ違う人間が少ないどころか、いないことに違和感を覚えながら、それでも足は止まらない。一直線に自身の分身とも、心臓とも呼べる工房へ向かっている。

キャスターの始末はランサーのマスターに連絡が取れてからになる。恐らくは三日はかかるだろう………それまであの女狐の対応をしなければならぬと考えると、面倒臭くて仕方がない。あのいけ好かない上から目線と、それを確固たるものにしていく魔術の力量が彼の琴線に触れるのだ。まるで自分が二流だと暗に告げられているようで——嗚呼、腹が立つ。

出会って早々に殴ってやろうか。理性を欠片も感じない程の怒りが沸き立ちつつあるのを自覚しながら、アトラムは工房へ踏み入った。

——そこにあつたのは、工房ではなく地獄だった。

「なっ………!!?」

導入されていた最新鋭の機材はスクラップ同然の廃材と化し。

培養液に入れ保存されていた魔法石子の素材供の姿は無く。

工房全体が蒼い炎で蹂躪されており、人の気配は一つも無い。

この惨劇が表に出ていなかったのは工房の隠密性が優れている証拠だ——しかし、今回はそれが仇となった。

アトラムはようやく廊下で人間とすれ違わなかった理由に気付いた。辺りに散らばっている黒焦げになった焼死体や、魔力を圧縮して

放たれたであろう魔術によってぐちゃぐちゃにひしゃげた死体……それらは全て、彼が地元から連れてきた女達だった。

恐らくは暗示でもかけて工房に連れてきたのであろう、彼女らの表情は苦しみを感じさせない普通なものだ。中にはアルコールを摂取していたのか、頬を染めて蕩けた表情をしている者もいる。だが、そういう表情が分かる死体に限って惨殺されていた。

竜に噛み付かれたように四肢が千切れているものや、首と胴体が離れて首を自分で抱えているものまで。

普段人間を魔術で生贄にしているアトラムでも思わず躊躇してしまふ惨状。だがあくまで躊躇する程度で、数秒もすれば直ぐに立ち直る事が出来た。

不思議なのは子供の死体が見つからない事だが、恐らく逃がしたのだらうと判断する。彼女はアトラムの魔術を見て「命を無駄にしているだけ」などと抜かしていた、子供には甘いのだろう。

「これはどういふことだ、メディア？ 僕の工房を滅茶苦茶にした上、従者たちまで殺すとは……。あの素材たちを逃がした事は許すが——流石においたが過ぎる」

部屋を中心——最も魔力が集まるその場所に、裏切りの魔女は立っていた。

彼女の顔は窺えない。マスターに背くように後ろ姿しか見せておらず、紫のローブを着けているからだ。幾ら英霊に押し上げられようと、本人は貧弱な少女だというのに……。悪名と胡散臭さの所為で、彼女から幼さという装飾を剥ぎ取っている。

怒りで魔術回路と令呪が蠢きつつあるのを感じながら、それでも穏便を取り繕ってアトラムは魔女・メディアに近づく。

あまりの感情の昂りで我を忘れている訳ではない。彼女の反応が無い以上、強引にでも此方に向かって必要があり、メディア程の魔術師ならば距離など関係ないからだ。手を振るっただけで魔術を成立させるような化け物を相手に、数メートルなど焼石に水にもならない。

「おい、聞いているのか。マスターである僕が理由を聞いているんだ、

答えるのが道理だろう」

メディアの反応は無い。ただただ背中を見せるだけだった。思わず舌打ち——そして距離を狭める。ここまで来て反応を一切見せないのは些か不気味だったが、令呪の準備は既に完了している。ここで消費したくはなかった仕方がない。使えず、叛逆するような裏切り者は必要ないのだ。

「メディア——」

アトラムがメディアの肩を掴み、強引に自身の方へ向かせようとした瞬間。

——メディアの手元から、彼女の首が転げ落ちた。

「はっ。」

間拔けな声が出るのを、誰が咎めることが出来ようか。

重力に従い落下した頭は一度床に跳ねた後、彼が昇ってきた段差をゴロゴロと転げ落ちた。その際、首が付いていたであろう断面から血肉がこぼれ落ち、アトラムの靴に付着する。

頭がある筈のメディアを見てみれば、そこは虚空。ローブが頭を象っていただけであり、中身は存在しなかった。よく見れば紫のローブは彼女自身の血液によって赤く染め上げられており、足元には血が滴り落ちている。

「なっ………おい、どういうことだよ……!!? 意味が分からない、なんでだ? どうしてこんなことに——!?!」

この時点でアトラムは錯乱してしまっていた。

工房は滅茶苦茶に破壊され、原因であるキャスターは死んでいる。冷静になれば他マスターからの襲撃だろうと判断できた思考能力は、混乱によって完全に機能を停止させていた。精神の集中が乱れれば精密な操作を必要とする魔術回路も起動せず、戦局を大きく左右したであろうサーヴァントは既に退場済み。

はつきり言って、彼は終わった。何故ならばキャスターを殺しアトラムの命を狙っている刺客は、正当な魔術師ではないからだ。

正々堂々の一騎打ちなど以ての外、暗殺謀殺はお手の物。油断すれば魔術で殺し、動揺すれば刃で殺す。

暗殺者のクラスに与えられたスキル『気配遮断』は攻撃時、スキルレベルが落ちる。どんな達人にも、自らの気配や意識を発生させることなく攻撃をする事は不可能だからだ。

そのアサシンの気配遮断は、とてもじゃないが高いとは言えなかった。従来のアサシン、暗殺教団の長たる山の翁ならば平均Aランクあるスキルも、このアサシンに限ってはC+程度。しかし魔術もろくに発動出来ず気配を探れない人間相手ならば、この程度の数値でも隠れることは可能だった。

正しく闇からの一閃。その一撃でアトラム・ガリアスタはサーヴァントと同じ末路を辿ることとなる。

「かひゆ」

最期の断末魔は、なんとも情けないものだった。

走馬灯を眺めているように世界は遅くなり、僅かながらに機能している脳髓と眼球は自身の身体から落下していく頭と絶頂するような痛みを知覚している。酸素の供給元である心臓から離れてしまった脳が待っている結末はただ一つ——死という、魔法でもなければ覆すことの出来ない事実のみ。

濁りつつある彼の眼が、自身を断った相手を捉えていた。

それは二人組だった。

刀に付着した血液を拭い、鞘に納めているのが先程アトラムを殺した張本人であり、暗殺者のクラスを冠す者——アサシンである。通常のアサシンと違う点は山の翁が身に付けている黒いローブと髑髏を象った仮面が無く、日本の着物を着ているところだろう。桃色の着物にブーツというミスマッチな服装は全て、彼女の素性を隠す為に他ならない。

もう一人はサーヴァントでもなんでもない、只の人間だった。否——

只の——という表現はふさわしくない。彼の全身に奔るそれはこの世に残る神秘、魔力と呼ばれるものである。青い着物を魔力で棚引かせ、冷たい瞳でアトラムを見下している。

この戦いが聖杯戦争である以上、彼はマスターだろうが………ならば違和感が残る。魔術師の戦いなどと銘打っている聖杯戦争だが、実際に戦うのはサーヴァントである。

過去の英霊を再現しているサーヴァントの戦力は戦闘機と称される。彼らのエンジンの燃料がマスターであり、戦闘に於いてマスターとはその程度の価値しか無い。

サーヴァントの隣に立つ者はいた。

魔術工房に籠り戦況を見守った者もいた。

サーヴァントを無視してマスターを狙う者がいた。

だが——サーヴァントのように、自ら戦場に立ち刀を交えるマスターは過去どれ程存在しただろうか？

「サーヴァント、推定キヤスターの消滅を確認。………同時にマスターの死亡を確認。令呪が残っていますが、如何しましょう」

「勿論回収するさ。二画、ということは絶対服従か何かで消費したな。服従しているような気配は無かったが」

床に倒れたアトラムの右腕には未だ令呪が宿っている。それを切り取り、アサシンの主従は工房を去った。

残ったのは恩讐と憤怒で燃え盛る炎と、最期まで裏切りの汚名を晴らせなかった悲しき女——そして中途半端な覚悟で闘いに参加し果てた、愚か者の死体だけだった。



「二騎脱落、これで敵対勢力は五人と五騎。………取り敢えず、作戦は成功だな」

炎上するアトラム・ガリアスタの工房。それを一キロメートル程離れたビルから双眼鏡を用いて眺めていた。

新都は冬木の中心地だ——そのビルが炎上したともなれば、消防署や警察を始めとする国家機関が動き出す。時計が無いので判

らないが、まだ三十分も経っていない筈なのにビルは赤いサイレンに囲まれ、その身を尚赤くしていた。既に消火活動は始まっており、下の階から順に水を放射している。

もつとも、それが効果的とはとてもじゃないが言えない。あの炎はただの火炎に非ず、英霊になるまでに昇華された魔術師が放つたものなのだ——酸素ではなく、空气中に存在する魔力で燃える。あの炎が燃え尽きるのは周囲の魔力が空になった時のみ、恐らく後数時間は燃え続けるだろう。

慌ただしく動き続ける消防署員諸君に心の中で敬礼を送りつつ、視線を双眼鏡から手元に移す。ポケットから取り出したそれは西洋魔術と東洋呪術が組み合わさった術式が描かれている札………などではなく、単なる携帯電話だ。

他の魔術師は兎に角、俺は普通に電化製品を扱う。何故ならそちらの方が便利だからだ。イチイチ会話するのに術式を組んだ札なんぞ使っていたら面倒くさい。

呼び出し相手はバゼット。彼女には予め携帯電話を渡しているの
で、こうして離れていても自由に会話することが出来る。

まあ、沖田との約束であまり話してはならないのだけれども。

「もしもし、俺だ。此方は離脱完了——目標拠点の炎上と目標の死亡を確認」

『了解しました。現在目標拠点の近くの路地裏に居ます、恐らく拠点に戻るまで少しかかるかと』

「判った。ならば三時間後、拠点で」

『では』

アトラム・ガリアスタの工房を落とす際、アサシン陣営とランサー陣営で仕事を振り分けた。

主に諜報や偵察、工作が得意な我々アサシン陣営が拠点の破壊と目標の暗殺を。

戦闘力や制圧力に優れているランサー陣営には逃亡された際の始末と他の陣営の足止めを。

魔術師の工房を攻め落とす時には、どうしても防御が甘くなってし

まう。二流だろうと工房の守りは堅い——攻めあぐねている間に背後からドズン、は洒落にならない。後ろをあの二人が守ってくれるのはとてもありがたい。

「……………まあ、彼女らに裏切られる可能性が無い訳ではないが。

「……………ふう」

当初の予定ではビルの地下駐車場に爆弾を配置し、だるま落としのような形で落城するつもりだったが……………思ったよりキャスターの裏切りが早くて助かった。魔術師のクラスに選ばれる程の相手と戦うのは骨が折れる。

この戦法はかの魔術師殺しが先の聖杯戦争で使用した手段で、ロード・エルメロイの工房を破壊するのに用いた戦法だ。これが中々効果的で、魔術師対策で仕掛けられている罠を全て破壊することができる。

爆発して動揺しているところを襲撃するもよし、逃げ出してきた所を強襲するもよし——此方にも危険はあるものの、効果的な策と言えるだろう。

だが、今回は地下駐車場に入った瞬間から作戦を変更して直接乗り込んだ。

作戦を切り替えた理由は一つ……………魔術的防壁が薄れていたのだ。前日確認した限りはそれなりに丈夫だった防壁が内側から脆くなっていた。外で感知した時には察知できなかったものの、内側に入ってみると想像以上に脆いのが判った。恐らく何かしらの魔術を受けて消耗したのだろう——真相はキャスターの裏切りだった。

他にも人間の気配が異常に少なかったり（彼は酒池肉林を築いていた筈）、侵入したのにアトラムが帰ってくるのが遅かったり……………細かい理由は幾つかあるものの、兎に角工房の核となっている部屋へ突入した。

冷たくなる程の炎に囲まれたキャスターは、何処か茫然としたような諦観したような表情をした後、静かに涙を流して絶命した。一刀の下に斬り伏せ、英霊を殺したのだ。偉業なのだろうが誇るつもりはさ

らさらない。

「さて——」

厄介なキャスターは処分し、サーヴァントは残り六騎。現状重要視すべき問題は——

「……………」

「はあ」

——血の海で倒れている、この病弱桜娘だろう。

思ったより『病弱』というスキルは厄介らしい。仕合の際にも実感したが、発動タイミングが判らないのが鬼門だ。沖田がこのスキルを発動させてしまうのは今回で四度目である。おまけに全て激しい運動の後と来た……………この感じだと、戦闘の後は全て吐血する可能性がある。

そうなると作戦を練り直す必要が出てくる。出来るだけ戦闘ではなく暗殺をメインにし、調査などは俺が引き受けて沖田は実動のみ——これが一番か？

「うーん」

「ま、ますたー……………すいません、けふ」

「別に気にしなくていいさ。仕様がな」

「で、ですが——」ごほ、ぐふう、がはあ……………」

これからどうするかは、取り敢えず沖田が回復してから考えよう。